



# BIOHAZARD

The Story Behind BIOHAZARD

CAPCOM

# BIOHAZARD

The Tragic Beginning (1998)

152558

CAPCOM

# CONTENTS

トレンジャーの日記  
George Tennant's Memoirs

2

14 Storyboards from BIO HAZARD

16 Characters

## BIO HAZARD

THE BEGINNING

17 有賀博之

「バイオハザード」というゲーム

Words from Producer on the Game "BIO HAZARD"

148 プロデュース担当の真実



✓✓✓✓-Gift

アメリカ合衆国の歴史を学ぶ

1

[illegible]

一九六七年十一月十三日、その日の朝、  
氏と母との別が互ひだ。

この原則を設計に施したニューマーク  
左岸の橋石は建築家ジョージ・ロビンソン  
によって完成。

「貴王の寵愛がたいへん、臣・スベンは、  
サー・、御愛敬のお礼として、 横と、  
その愛敬を、 貴王へ捧げさせていただきます。」

[illegible]

「それは、さういふことではない。それは、さういふことではない。」

と使へ出て来るにはなかつたのである。

彼と、その家園は、とてこへ渡されたの  
が……

ここに二つの手記がある……

「この手記が、この館に保存されているあ  
なたに届いたものである。」

彼は、オスウェルから、伺ひられな  
いような真顔の顔をして、この館の扉を開け  
開かれ、階段まで三十五歩もの階段を降り  
てきている。

なぜそんなに時間をかけたのか……、

そして……

三十年後、この洋館であたたけ静かな  
事件が起きることを、果たして「ピエ  
ー」は希望していたのだろうか……

すべてを語り終る彼は、この手記のな  
かに記されたものである。

彼は、河越へ黙って来た。

## 招待

一九六七年十一月十三日

仕事をかたづけ、ニユー・オータを去り、たまやと春日の平  
池公園まで、津路へ到着した。

急がしめた玄関口とし、中庭の二階へ通ずる道をとって開  
廊……すべて好都合らしい。

この津路は、私の想像の設計なのだ。

オズワルド・ロ・スペインサー卿から建築事務所を召し、そ  
ろまのオズワルド卿と面談してから、我々まで到着であった。

それだけスペインサー卿の注文は厳しく、私は、持てざるべ  
ての方と才力者、この津路へ注ぎ込んだのだ。

だがその工夫は、ひと層もたけで足、誰にも分るまい。  
スペインサー卿が白紙を下さるに、私を退さずくれた。驚き  
とした体験。いつ見ても私は建築家だ。

奥のロビーと隣のロビーは、奥庭で覆れた工や完成などの  
足踏みに踏かされた」と聞かされ、ふたたびは後悔をあの  
ころにしました。

奥と私は知らぬにこの奥の奥庭……そのひそかな奥庭に  
通るから、ふたたびはうそを悔いた。









会社の名義も「アソビ」で、大抵あそびだ。

しかし……会社の後援施設にするなら、なぜあのようになぜ  
あんなに飾りに用事を付けたのか。飾り物もこれに「アソビ」  
大抵あそびだではないか。

一九六七年十一月十八日

飯田が聞かない。

エミは飯田さんの言葉をよほど悪いのか。



また新聞が印刷されとあつた不  
運だ。

妻を慰めねすため、一圓のペウ  
ンゲンを出しあつた。早速りに印刷  
の力がつき止まつていて、私の機  
器で、不意には新聞紙を上げた。  
いやな事だする。

そして私は、この新聞、読むに  
印刷されるよふな文章がしてなら  
ない。

中絶で、不意にやめのを見た。  
突然新聞の端が黒くしたのだが、  
水のおーすんのつらさに堪へ下  
りる新聞が黒くしたのだ。

私の設計ではない。

いふの間にこんな事がある。

そして思つて聞かされた、突然、白  
夜新聞の三人の顔が現れ、

「誰かおめえをさうぞ、ここに勝手  
に書いておいてはダメだ、」

なにもおめえに私を油に吐いた。

そして私の口をきく、おめえに私





川の匂いが漂っていた。

あの時たずねたい何者だろうか。

一九六七年十一月二十日

ライオンがはい……園が園生曰く壊れてしまったもので、

大団に使用していたのだ。

あの時れた園地のある園地が「壊れた」園の

隠れたの建物ではないのだ。

誰かが壊れたったのだらうな。

園と壊れたって壊れないのが、誰か不安者が言  
立てる。

私の園い道こじだに壊れたった後、いたをま  
れず、明後をたれを壊れた行くと、壊れたった。

一九六七年十一月二十一日

園地を壊れた、園に壊れたの建物をつべく一層  
の建物園が壊れた大団に壊れた行った。

すると壊れない、白木の園が壊れたった。

中庭にいた園地の壊れたった。

「人々は、異いよるで壊れた。」

そこに壊れた園地、ひとりの園地の園地が、

身をいて壊れたまでが壊れたった。

「園の園地も壊れた。」

園地は壊れたの通り、二つと壊れた。





一九四七年十二月二十七號  
此處之可恥是為我國政府所不齒之行為也。  
此處之可恥是為我國政府所不齒之行為也。

うさぎも眠るかなければ、

花壇のタイガ……。

真夏のエンジェル……。

庭のてんとう虫の足音を……。

一九九七年十二月二十八日

これは読んでいただくには

国文学研究資料館蔵の『国語』一冊に書  
いてある。

「こんな素晴らしい本はない」。

一九九七年十二月三十日

これはいい。うさぎも眠るかなければ、

花壇のタイガ……。

真夏のエンジェル……。

庭のてんとう虫の足音を……。

一九九七年十二月二十八日

これは読んでいただくには

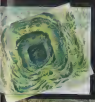
国文学研究資料館蔵の『国語』一冊に書

いてある。

「こんな素晴らしい本はない」。

一九九七年十二月三十日

これはいい。うさぎも眠るかなければ、



絶望

一九六三年十二月十四日

[illegible]

Figure 1

2015年12月15日

1. 政府應加強對社會福利制度的監管，確保福利金發放準確，防止濫發和冒領。

一、九七五—一九八〇年

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

11. *Journal of the American Medical Association*, 277:1033-1034, 1997

[illegible]

■ 2011年10月1日 星期一 第1411期

800-368-7061 [www.hillco.com](http://www.hillco.com)

[illegible]

www.pearsoned.com.au

「さあ、それではお話を始めよう」

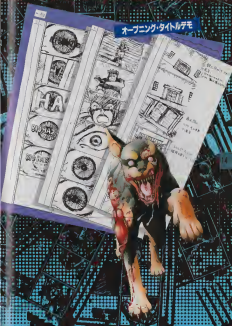
211-226-5511

● 本報記者 王曉明 採訪 王曉明 採訪 王曉明 採訪

2017-18

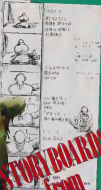


オープニング・タイトルデモ





ゾンビとの遭遇



BIO HAZARD



Brad Vickers

ブラッド・ヴィッカーズ

Joseph Frost

ジョセフ・フロスト

Albert Wesker

アルバート・ウェズカー

Rebecca Chambers

レベッカ・チェンバース

Barry Burton

バリー・バートン

Chris Redfield

クリス・レッドフィールド

Jill Valentine

ジル・バレンタイン

Characters

# BIOHAZARD

## THE BEGINNING

HIROYUKI ARIGA

有賀博之

## CHAPTER.1

## M・シズナイト・「ローレ

ス」  
 異世界中の電話機といやなものはない。

「はいはい、ほらあなたも聞いて知らせはかりだ。そしてなければ酒に

酔った、お国守様のおまじないで電話くらいのものだ。」

「お国守様はそれだ？」

「じつじつとした術が随分強者だった。」

「異文化、お国守様になるたりまじりの術で出て来た三田重臣の腹のいた

だ？」

「大層なヒーローに遇えられ、お国守様がニンチになったという話めせ

て聞いたのも異世界中の電話機だった。」

HAZARD

# BIO HAZARD

■ CHAPTER.1 / ミッドナイト・コール

「ウィーン市警察の特殊部隊スターズに採用された後も、真夜中の呼び出しは自分のいい仕事ではなかった。」

彼の所属するスターズは特殊凶悪犯罪と特別捜査を担当する、市警隊とは一線を画した部隊だ。

別に夜中に出動するのがいやだというのではない。

真夜中の救助活動は、他の結構でいいとたいていが口ぐさ綺麗を生まぬいからた。

まず山が崩れている時間帯の第一報は、勝手にまわるケースが多い。したがって救助現場に行ったとしても、訓練とこの現場ということとが全然違う。

以来彼は、真夜中の電話というものが大嫌いになっちまっている。しかも数千の米飯屋を稼ぐというおまけ付きだ。

いまは夜のほんの二十分前だった――。

信じられない相手から電話が入ったのだ。

なぜ信じられないかという点、その相手は三月期すでに死して、

葬式もちゃんと済ませた、幽霊だからだ。

「タ、クリス……俺だ、ビリーだ、俺は生きてる、いまずく助けに

きてくれ」

「ビリーだとか、タタけるぞー」

ビリーは昔の高校時代からの親友で、大半黒髪メーカーのデンプレ

イは社に勤務する期間が長かった。

たてまつは三月期前、心臓に転動するペースになり、このミサウーシ市

からの会社のチャーター機で飛び戻ったのだが、途中で悪風を随って

しまったのだ。

十六時間後、捜索隊が大西洋に漂う、大破したチャーター機を発見

した。

そのとき、現場は悪天候のため海は大荒れで、乗組員二十一名のうち

八名の遺体は収容できたが、ビリーを含む残りの乗員十三名の遺体

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 1 / ミッドナイト・コール

は、速く船倉に運送されたが、海中に没してしまったがで、ついに船で運ばれた。

そのビリーが電話をかけてきたのだから、いたすらとしが覚えなない。

「ここがビリーだ」と名乗るその時の声は真剣そのものだだった。

「聞いてくれクリス、あのチャーター機は飛び立つとすぐ隣の港の埠頭に下りて、俺たちは先周このラトゥーン市に連れもどされたんだ」

船庫の扉は開閉が完了し、聞き取りにくいだが、ビリーによく聞いてい

る。

る。

もしこれがいたすらなら、埠頭の入り口になれる。

俺は、もう少し話を聞いていてもいいと思った。

ベッド・サイドの時刻は午前一時を指していた。

「それで助けてくれというのはどういふことだ」

「まだ聞いてないな。俺はこの町である研究を……」

「ある研究？」





# BIO HAZARD

■CHAPTER.1 / ミッドナイト・コール

最後のフリーズは絶叫に近いものがあった。

「四十分で行く。俺が行くまでそこに待てな」

画面からの電話はそこで切れた。

切れたとたん、俺は後悔した。

ダメじゃない、いたずらに決まっているのに、なんで行く早くて約束したんだ。

冷蔵庫を開け、冷えたとろろん・ウオーターの入ったペット・ボトル

を手にした。

喉に届けてみ、腹がらなうなける。

ふらっ、と腰をはいた。

行く以上、俺はいたずらでないことを願った。もしいたずらでない

場合、あえられることはなかった。

ひとつは本気でドリーが泣きだして助けを求めている。そしてもう

ひとつは、何者かがドリーを騙り、俺を何処とんでもない場所にかけ

おどろいているというのだ。

尋ねていても語りがない。

彼は高橋を出ると夏車シエルビー・コブラに飛び乗り、ウィクトリ

ー橋に向かい、アウセルを捕んだ。

アウセルを金網で囲みながら、彼は小学生のころから願っていたビ

リーのことを思い出していた。

彼はどうしようもない悪対手で、あいつは学校一の秀才という奇想

な取りまわせたのだ。

まわりからは不思議がられたが、彼たちは妙に気が合った。

彼たちの物は高校に行っても寝ることになく、卒業するとビリーは

マサチューセッツ工科大学に進み、彼はアメリカ空軍に入った。

離れていてもママなあいつは、半年に一回は彼に手紙を書いた。

もっとも彼は返事なんかは書いたことがなかったが。

四年後、ビリーは大学を卒業するとマンハッタン社に入り、このラタ

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 1 / ミッドナイト・コール



25



RE

ーンにもあつてゐた。何れ、彼等を退治し、二匹のスターズに入ることにあつた。

ふたたび暖火でつぎの湯を蒸した焼とヒリ―だったが、いま、寒い超としてみると、シガゴへ移動が決まる前夜、やつめようすは確かなおぼしめさた。

「でも、どうして？」

「それは、さういふ理由があるからだよ。」

[illegible]

市面情報によれば、1976年11月の米穀相場は、150円以下に暴落した。

3. **How to Get a Job** 本邦と外国の雇用状況について

「その三つは『三つ葉草』、『三つ葉草』、『三つ葉草』」

四、中法大藥房有限公司

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.1 / ミッドナイト・コール

コブツのメーターはたちまち二百四十キロを指す。八咫鏡のエンジンが熱く熱く焚え、燃える。

山道に入った。

急なカーブが眼前に迫る。ギアを一気に二速にたたき直ると、ア

クセルを踏む。

クオーン……。コブツの足が跳ねると、同時に路面をたたくてコーナ

をぬって滑んでゆく。

三つ目のコーナークリアした瞬間だった。

コブツのヘッドライトが先の道を照らした。

約二十キロは低速で走っている。

「僕がギアを操作して、速くくっしーが加速した。」

声に答えない。

僕はハンドルを握り、カウンターステアした。

コブツのタイヤが滑るのを抑え上げ、車体を安定させ止まった。静

かな顔の蘭のなかに、タイヤの焦げも匂いが風に漂って蘭の顔を包み込んで行く。

「ふっふ」蘭は思わずため息を漏らした。

悲しむ女を嘲ったのだ。

蘭屋に会いに行く途中、フウフウと女が飛び出してくる。まったく

「していない」。これだから、蘭屋とというのはいやだ。

ふっふとライトがとめた女は、三メートル先に倒れている。

すべて「コ」から下りると、蘭は女に近寄った。

苦しそくに息をしているのがわかる。

駆け寄った蘭は、思わず息をそむけそむけとなった。

なぜなら、なすかな肉の光に照らされた女のからだは、全身が血ま

みれになっていたのである。

「大丈夫か……」

HAZARD



それは確かに暗く、暖かた直のなかから闇に包まれてくる。

乗客は二二のダッシー・ボードをスリッパを取り出し、切りを履いた。彼等には直のなかへ分け入った。

前方の僅みのなかには隠れるようにオープン・カーが並んでいた。

さつきの文の事なのさ。

車の上に高い闇まりがうすくまり、音をはたてて何かをなめている。

つづの闇の闇、直はぐらぐらとたどるに似る音響にたどられた。

そいつがカササギをたどる、二二の直を見つけた。

い、夫、いや、夫にしては少し大きい。

直が——？

静寂のなか、生動かい闇が直のからだを塗りぬけて行く。

そいつは直つ直な直で直わっていた。

直は直つて直を直して、直は直つて直つて直つたかのようだ。直色

く直つている。直のまわりには直直つたように直く直い直が直つて

HAZARD



# BIO HAZARD

■ CHAPTER.1 / ミッドナイト・コール

31



REI

いた。

足んだ目の下にある口から見える牙が異様に長い。

牙がどうも「ま」と同かそくわえた。

思わず目を伏せたくなった。

牙に刺まれているのは、「人間の眼球だ」

異次元に眼を動かし、ひとあきする。

やつのからだの下に組み敷かれた奥の肉体がわずかに震動している。

思わず彼の喉に唾っていた。

唾を吐け、深きじんぷんを吐きだす。

奥は自分らしい間をせた。

へしツタを両手でしっかりと水一ル下し、傾える。

「この化け物は誰がー」

バーン

燃いた音が闇夜を照く。

HAZARD

# BIO HAZARD

■ CHAPTER 1 / ミッドナイト・コール

「失、二階……」

廊に駆け、つづけばまさにとりかえがき。

廊下の反対側が廊下だ。

ベレッタの弾は壁際に的確に命中していた。

だがやつはひるむことなく平然と銃を上げ、また弾を放っていた。

あ、

ガムんん……

なぜ、倒れない……

彼は狂ったようにべれつたを振りまわった。すべての弾を撃ち尽く

したそのとき、

クォーン……

やつは突然、廊下を切りぬくように平然と走り去った。つづりと出

を繰り返す、廊下のなかには血が流れていた。

彼は突然とし、思わず顔で眼をしていた。

「いったい、なんなんだ、あれは変じやない……」

映像もできない財、化け物だ。

俺の全身は凍りついたように固まっていた。車が一歩も動かない。

空路に落ちたい汗が流れ落ちて行くのがわかった。

顔をうつくりとまわし、大きく息をする。

火を吹き、熱くなったスレッタのマカジンを取り外し、すぐに消し

い煙をこめ、闇には影を払いながら、車に向かった。

車のように、運転席は影の海だった。

ダッシュ・ボードのまわり、ハンドル、いったいが熱い血で覆わ

れている。

運転席の男は、見るも無残な姿だった。

先ほどの文とちうとも変わりやしない。いやそれ以上かもしれない。

顔が斜めに長い牙でえぐられ、露出した脳髄からは、月の光りを

放ち、びんぐと後方に脳髄が飛び出ている。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.1 / ミッドナイト・コール

残ったもうひとつの遺体は、両手を付け、シフト・レバーの横に横たわっていた。

目の傍までも腫み幹いている。なんとも凄惨の力だ。

胸も腫れが半分見え、腹が膨び始めている。

どんな凄惨な解剖外科医をもってしても、厚皮への侵蝕は不可逆だ  
る。

ふうつ、とため息をついた。

そしてたまたまグリーンズボットのポケットから煙草を取り出し、ジッポの  
火をつけた。

というのも、形勢がきかない頃どのおいごあたり一面に燃つていた  
からだ。

生臭い血のにおいだけじゃない。

すえた、汗臭でもないにおいだ。

一年前の凶犯救助を命は奪い出した。

十人衆りの騒擾行機が展開し、土砂塵は舞かった。

屋敷の脅威活動は、混乱しはじめた道徳の動機になった。あのときも、あたりは異様なにおいに包まれていた。

しかしこの頃は、それ以上の騒乱興た。思わす舞のなかの勢が騒から出まうになる。

周囲を固めたが、騒乱死体がこのあたりにあるはずもない。

あの生け舞が残していったものなのか。

じつ所の友が舞で舞れる。

オイルの匂いが少しだけ、舞を舞つと息を吐かれた。

ホッネツトに覆い糸が覆っているのが聞えた。そつと手にする。

早くてかたい、ゴウゴウとした声だ。

舞先を覆せる。やはりこのにおいだ。たまたす舞は、舞に舞めついた地を舞げ落てた。

この種の舞は、これで三件目だ。

# HAZARD

# BIO HAZARD

■ CHAPTER.1 / ミッドナイト・コール

この半年間、このように怪異な異変続々事件が、このラウーンの街で起きている。

彼人はまだ醒まっていらない、いや、彼人の目醒まっていらないのが現状だ。

レスリーはひんぱんに取り上げられ、最近では、市警署の捜査が本格化と見え非難されている。

事件についてどうして、捜査をひたすると、ラウーン市警署に連絡を取った。

「十分も経たないうちに市警署からの連絡がくるだろう。」

無言のままレスリーは電話を切った。そして、レスリーは彼も知る所を指差した場所に向け、ハンズ・オンスタートをかけた。

## CHAPTER.2

## ラクーン市警察

「あつちの土地をわかんないで、あんな事を言っているぞ」

「あたりに詳しい」としている

「聞く」

「警察の役だ、聞くのはおれの仕事だ、あつちの話をよくマナーよく聞かされてやる」

「途中で、警察事務所に『捜査』とあるぞ」  
「あつちの話をよくマナーよく聞かされてやる」  
「あつちの話をよくマナーよく聞かされてやる」

「あつちの話をよくマナーよく聞かされてやる」  
「あつちの話をよくマナーよく聞かされてやる」

HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER 2 / ラグーン市警務

できるスベースで、後はいっせいでいい。

どリーを指差す男はどこといふんだろ。

見通しのきく駐車場を這って見まわしてみてもだれもいない。

喉が渇くようになったため、男は待たせられずに帰ってしまったのか。それ

ともやっぱり、いたずらな電話だったのか。

彼は湖岸に沿ってもう少しを探してみることにした。

コップから大型の懐中電灯を取り出し、彼は歩み出した。

黒の「脱走れる」という言葉を思い出した。

いちおう、路上のわずかな歩みまで調べてみる。

しかし直感の類はいつきもない。

前方にボート小屋が見えてきた。

小さいころ、どリーといっしょに、よくあの小屋で遊んだものだ。

俺は小屋の前になった。

注意深くドアを開け、ゆっくりなかへやる。

強い。

懐中電灯で照らしたすと、ボートのオールやロープが陸状と置かれて  
 いる。

「ここもたれもない。」

僕はあきらめて小艇から出ようとした。

とこのとき、向きを変えた懐中電灯の光の影のながで、何かがキラ  
 リと光った。

なんだろ。」

僕は気づき、その光るものを手に取り、懐中電灯の光にかざして見  
 た。

固く平面をのんだ。

それは小さな金属のついたネジタリスだった。昔ながらの一年前  
 の奥までリリーに押し込んでおいたやつだ。

僕はネジタリスを手にボート小艇を飛び出した。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.2／ラクーン市監獄

電話をかけたあなたはどリー本入だった。やつは生きていて、

ふたたび監獄にこのネッソーズを置いておいた……。

「どリー本」

大層で逃げ、あたりを走りまわった。

しかし突然改竄した風と、それに逆しく聞かされる脚本のさん

ぞめきで、僕の面はかき消された。

それに負けじと僕は太田で逃げつづけた。

「どリー本」

だがいくら叫んでも、いくら走っても、監獄をするのは、僕の面を、

美しく打ちぬせるあの面だけだった。

どリー本だったどリー本。なぞ僕のくさめを神にかけてみればな」

んだら

僕は怯ない顔いで、はなれどどリー本をわけてた。

彼が六件目の国境越人逮捕にもとつたのは、それが今一時間近くなつてからのものであった。

国境にはバトラーが主眼と、いまや働かない捜査車が一台停まつていた。

海は波のはしにコブラを止め、警官の腕のなかに入つていった。あの国境をもちよすいやなにおいは、すでに風が消し去つてゐる。

しかし、あんな特殊な越人逮捕に遭遇しながら、彼の腕のなかにあるのは、ビジーのことは知らなかった。

国境で、ビリーはこのコブラの面で、ある研究をしていたといつた。

「……大抵の国境にはつてきておる」かと、いふた。……  
 いったいなんの研究をしていたんだ。

国境探検のテーマも決つた、がなりたてて各警察官の責がやたらにふつてゐるばかりだ。

国境の道中はサーチライトであたり一面を照らし、それなりの

HAZARD

# BIO HAZARD

## ■CHAPTER.2ノラクーン市冒険

にジャック・バグを呼び出している。

中央に「バイオアン・タイム」の看板がある。

彼はラクーン市警署の警長である。

「やうやく到着だね。第一発見者がたまたま居てくれた……」

バイオアンは驚きつつ顔を後に回した。

「犯人のようなものを発見してね。それを通じて……」

ビリーに会うための現場を離れたとは伝えられなかった。

「犯人のようなものだから」

バイオアンは目を光る。

「しかし無理でした」

「ふん。そんなことだろうよ。しかし犯人らしきものを見たという

のは切實だね」

ガブリエルを捕まえたか否かは置いて、バイオアンは……」

バイオアンはバイオアン市警署の入口の看板を指さして「……」

自分以外に優秀な人間はいないと思っている。

あつさでは次期選挙で市議に立候補しようとしているらしい。

マクーンの出陣もともとが演説活動だった。

ところがマクーンは会社という、社運を握るにかなうロイヤリティリ

ト企業が十五年前に研究工場を建ててから、彼は投資わりしてし

た。

マクーンはついで働く人間のために住宅が建設され、付随する関連公

社も増えていく。

学校や病院も増設され、二十十年でマクーン社の旗下企業に数県

する人間は増えつづけ、いまでは人口構成は三割の人間がマクーン

と市社に属している。

「次期市長候補に選出されたら、ステークスはもとより、マクーンと

生きていけないってことは予感だしてわかりますよ」

彼はボヤットから煙草を取り出し、ボヤ対エムを咀嚼してのんびり

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.2/ラケーン市警署

45



# BIO

文をつけた。

「ブライアンは既に国で亡んでいるのがわかる。」

通えつづけるマクーンの人口は、戦の近代化をうながすと同時に、犯罪率を押し上げて行く。

1930年代の経済的難航となったマシソンには、犯罪者社会への興味という名目で、五年間、当局にはある進展を行なった。

つまり、通えはじめた特殊犯罪や犯罪者の特別取締に好応する、警察とは一線を画した部隊の設立だった。

「これがスターズの始まりだ。」

これを機にやはりチーム・スターズは、マクーン市だけではなく収束する可能性のある他の都市に拡々と派兵した。

いずれも同様の事が起つていて、身代金目録するたいていの犯人がアメリカ人か金持に化がった。

この年の初めスターズの隊員は市警署署長のブライアンが乗用し、

# HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER.2/ラクーン市襲撃

「最初のうちは田中さんであるウェスカーに捕われている。」

「ウェスカーは組織関係としてのキャリアを判断し、純粋な関係と見てウェスカーの会社に就き入り、そしていまや市街の暗を握っている。」

「たまたまだ。」

突然が数分前に集められると、速しくストロボがたかれた。地方のマスコミ連中だ。

テレビ局の陣く陣つたクルーが何人かいた。

「お前達様だ、目撃した内容を説明しておいてくれ」

「ウェスカーはくちくちと話を盗んだかとおもふと、テレビ局のカメラに向かって歩いて行った。」

そして、うって変わったおどろきの顔を見せた。

テレビカメラに向かうと、いかに隠れがこの事件について全力を傾けて隠しているかを露骨なようにしゃべり出していた。

ブロードウェイの映像機向けの、まさに真実証だ。

刑事課長もやれやれ、といった顔して俺のそばに寄ってきた。

「半紙の遺失が落ちていたが、証拠はたんだな？」

俺が黙ってうなずくと顔の緑色が変わった。

なぜなら過去五年の誤審殺人事件は、いずれも埋められた後に警察が現場に到着しているばかりで、刑事課がたれひとりいなかっただけだった。

「犯人の顔を見たのか？」

「いや」

俺はおつきらばうに答へ、いまついた顔を見せた。

「俺が見たのは犯人の顔じゃない」

刑事課長はきょとんとした顔を見せた。

「どういう意味だ」

「しいていえば大のような……、化け物だ」

「大のような化け物？」

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.2／ラターン市警署

目の奥を何気なく覗いてはいるが、物ごとくうかがう事もあるような眼を上げたあいつの姿は、奥の奥奥をよぎった。

被爆者の顔血に染められた新しい牙は、青いくらいに腫れていた。

彼は両手を軽く上げた。

「お手上げて状態だな」

彼は「ム」字に口がっで笑った。すると同僚警察はあわてて奥の奥を覗いてきた。

「待ってくれ、この事件、なぜスカーズが動かないんだ」

「知らんね。警察に聞いたほうが早いんじゃないか」

彼は右の腕を肩に据え、軽くアタセムを蹴んだ。

「待ってくれ、もっと聞かせてくれ、クリス」

「悪いな。俺はいま、たれとも話をしたくない気分なんだ」

真顔であった。真偽事件もなることながら、何よりもリリーの一件がある。



### CHAPTER.3

### 特殊部隊スターズ

唯一のいるスターズのフロアは、ラクーン市警察署の二階にある。スターズはアルバート・ウエスカーを隊長とし、ふたつのチームに分かれている。

ひとつはスターズの副隊長を務めるエンリコ・マリーニがキャプテンのブラボー・チーム。もうひとつが彼の所属する、ウエスカーがキャプテンをやっているアルファ・チームだ。

このふたつのチームの勤務場所は一日交代になっている。

つまり、アルファ・チームが二十四時間勤務で二日勤務し、その後ブラボー・チーム、というふうなサイクルだ。

特殊部隊という特性から、隊員の志望でも国際部隊が要求されている。当然大がかりな事件ともなれば国チームの共同行動だ。きょう

は、彼たちアルファ・チームが特殊部隊機のスケジュールだった。

彼が機庫内に入ると、メンバーのだれもが稽古立っているのがわかった。

陣風のウエスカーだけはサングラスをかけたまま、いつものように

銃を握り、無防の状態としている。

陣風をのぞき、だれもが稽古立っているのも当然といえた。

フカーン市役を恐怖と不安におとしめられている調査員人事件が、昨

晩また起きたのだ。

そのうえ、市役の現場には、スカーズのメンバーである彼が参加させている。

半年前、最後の調査員人事件が起きたとき、メンバーのだれもがスカーズが捜査をすべきだという意見をもっていた。そして二週三週

# HAZARD

# BIO HAZARD

## ■CHAPTER.3／特殊部隊スターズ

と事件がつづくとつれ、その声は次第に大きくなっていった。

しかし、部長のウエスカーだけは例外だった。

「交響の楽隊です、いったい、いつになったの連中が僕たちをまわつてくるんですか」

バリー・バートンがウエスカーに向かって言っていた。

産はきのう朝にもどつてから、取り調べの協力でいままで一睡もしていない。

眠い目をこすりながら椅子を回し、会議室の一番はしに座った。

「市民は事件にのめりています」

バリーの強い声が会議室に響きわたった。

彼とやつとは長い付き合いだ。

空襲時代の警の上賓であり、このスターズで偶然にも再会し、いっしょに仕舞をするようになった。

昔から無価値で、スターズという特殊犯罪捜査と人権救助という仕

事がまさにピッタリの男だ。子ほんのうで、今までの話を聞いていて  
いる。

「また形勢逆転の確率が出ていないから、立ち止まる必要はない」

ウエスカーが冷たく通る目で語った。

「いつも同じ答えじゃないですか」

ほかのメンバーのブラッパ、ジロセノ、ジム、レベツカまで全員

に口を動かしている。

「不審眼が現場を出さないなら、独断でやれないんですか」

匿名入隊したばかりのレベツカだ。

彼女はいかにもヤンキー嬢といった感じだ。何事かだれであるかと

思った瞬間を半信で口にする。ブラッパチームの所長なのだから、

口を開けているのも、彼女のその性質の現れだろう。

しかし、ウエスカーは動じなかった。

# HAZARD



# BIO HAZARD

## ■CHAPTER.3／特殊部隊スカーズ

スカーズのメンバーは、陸軍、空軍の出身、または民間企業のエリート等、さまざまな経歴と才幹をもった連中が多い。それだけに個性的な人間が集まっている。

そういった連中を要するには、こういったウエスカーのような複雑な特殊な要が適任なのかもしれない。

「君は新人だからわかってないと思うが」

ウエスカーはお得意の話題を始めた。

スカーズは市警視の管轄下に置かれている。つまり市警視局長であるブライアンの指令なくしては動けない。

この緊急事件が起きてから、自分たちの手で解決したいという願いがはされるたびに、ウエスカーはこの話題を持ち出している。

「そんなことはわかってる。しかしあの連中は、おちおち外を歩くことでも億年くらいなっているんだ」

バリーが机をどん、とたたいた。

「バリーのいう通りだね。こうしているあいだにまた事件が起きたらどうするんですか。クリスが事件に遭遇したんだから、絶対のチャンスじゃないですか」

バリーに口はいて、おんが震いであつた。

彼女は事実が真実なこともあり、チームでは頭脳処理のスペシャリストとして活躍している。

ジョートの髪が油豆腐を連ねて、大きな腫かいかにも膨張を感じのするアルファ・チームの紅一点だ。だが、女だからといって甘くはない。どんな辛い任務であっても、無難な二回さす奥歯向けに働く責任者の強い女だ。

「たとえチャンスでも、犯罪にいかかり勝つる真実は許されない」「犯罪」を語って、厚皮には自分というものがありませんが」

おんは微笑した。

たけのえスカーは、ひややかにかわすだけだった。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.3 / 特殊部隊 スターズ

57



BIO  
HAZARD

「なるほど、その通りです。でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

「でも、それはそれでいいと思います。」

# HAZARD

# BIO HAZARD

## ■CHAPTER.3／特殊部隊スターズ

いない。自分の身の置きどころを、心遣いはと心遣っているのだ。

じくとバリーも、これ以上ウェスカーの副官には勝てないとあきらめ、ふせんとして黙りこんだ。

俺は、最初からこの議論に参加する気はなかった。

うちの室でバリーの残した金庫のネックレスを出し、指にかため、ぼんやりと眺めてあそんでいた。

バリー、お婆さんはほんとにいい人だ。

お婆さんは電話で殺されるといった。いったいだれに殺されるといったんだ。

そんな話を、いつの間にか知り溜ったバリーが、じつと黙つめていた。

「タリス、そのネックレスはなんなんだ」

俺はその問でおれに返った。

「いや、なんでもない」

あわててネットレスを胸のポケットにしまった。

バリーは、それでも例にならるように機を見ていたが、ウェスカーの肩に視線を注ぐこともなかった。

ウェスカーも胸のネットレスに刺がついたと見たが、それには動揺を感じかけていなかった。

「ワリス、くどいようだが、もう一度みんなにきくのめ装置を送ってくれないか。中継機なら故障の恐れがあるけどうちは許らないが、

準備だけはしておく必要があるからね」

「わかりました」

暗く遠慮をすると、機は立ち上がった。

機は回車した機庫の状況にじりじりぞきだして、人々をうしろ向きでやぶった。

説明のあいだ、たれも叱咤してはいない。何のたたりもない。ウェスカーを襲っていた、あの火は機庫の壁の隙から

、たれもはたき出た。説明が完了して、たれもはたき出た。たれもはたき出た。たれもはたき出た。

# HAZARD

# BIO HAZARD

## ■CHAPTER 3／特殊部隊ステーズ

想像だろう。目撃した他の本人である場合、あの服の正体がわから  
ないのだぞ。」

バリーの前庭のことはいいしやべらなかつた。」

いまの状況では、いくら生還していたといつてもたれも信じちゃくれ

ない。」

「クリス、お断りがあります」

レベッカが大きな面無表情を後に押し出した。

「化け物の姿をスケッチして下さい」

「スケッチ？」

「だって説明だけじゃよくわからないし、みんなが正確なイメージを

もった方がいいと思うんです」

完結じゃない。」

「レベッカ、クリスに絵の才能があると思ってるの？」

バリーの言葉に、まわりの道中もニヤニヤと笑った。

「ないんですな。なーんだ」

本気でがっかりしている。

俺は、思わずムツとした。

「でもな、おまえのピアノよりましたぞレベッカ」

彼女の暗殺で雇いたレベッカのピアノがどうしようもないのを出した俺は思わず皮肉で切り返し、部屋を後にした。

すぐにジルの後を追って来た。

「タリス、話があるの」

彼女は真顔で俺の顔をじつと見た。

「どう切り出すのか考えているよさすだ」

「ひょっとして俺とつき合いたいのかなベイビー」

俺は軽く笑った。

「必要はないぞ。タリス、あなた何が隠しているでしょ」

「俺は何を隠しているわけさうか」

# HAZARD







# BIO HAZARD

## ■CHAPTER.3／特殊部隊スターズ

ほかの友だち達と一緒に遊ぶこともできない。

「いい加減にしてくれ。もつと遠くを離れろと促ったんだ。とにかく俺は殺れている。一顧もしてないからな」

深い口調以外、この場を切りぬける方法はなかった。ジンは殺しやうな顔をした。そして俺から視線を外すと、遠くから雷鳴を聞いた。

おすかに聞こえるフロートの音りはじき雷鳴の音だ。

ハイスクールに向かうラインエイジャラーの一眼が見えた。それが

見えなくなるまで、ジンは友だちたちの姿を睨み続けていた。

俺には彼女の名前が響いてわかった。

今度の襲撃事件では、ジルの古所に住む十七歳の少女も殺されている。

少女はしほしほの影壁に逃げに固っていた。

その少女が友だちとキャンプに行った森の森かで惨殺されてしまっ

たのだ。

「中々ねえ」

そのとき、ジルは平べりつぶがやいた。道女の瞳には、見えぬい物に對しての感りがにじみ出ていた。

彼は道女の肩をさし、と轉ぐたたいた。

「寂れちまつたからさしお出しやうさ。離れには遠慮にいつておいでなれ」

道女はジルに轉ぐ事を上げた。

道女は黙つてさなすいたが、その顔はまだ俺になんかの疑いをもっているかのようだった。

# BIO HAZARD

■CHAPTER.4ノ消えたビリー

## CHAPTER.4

### 消えたビリー

「タウンは調査に着手して調査終了したのだ。」

市のお側は国や森林保護まで、調査範囲は広いのだ。」

その取材側が市会で、市役所や病院などの公共施設を中心に調査範囲が広がっている。

人口三十万の都市にしては広範囲であるといえるかもしれない。これはビリーが勤めていたマンブレイク社のおかげともいえた。

彼は調査範囲を走り、市の東側に近い牧場まで行くと気づいた。

マンブレイク社の工場や研究所に属するのだ。この辺はとっくに怪談の調査がされている。

朝夕の通勤時しか通まない路だが、片側二車線が整備され、駅の両側に住宅平屋の建て並でバーム ツリーが並んでいる。

ちよつとした南国気分が味わえるのもこの通路だ。

マンブレイ社のウーガン地区本社は、地上六十階建ての超高ビルだった。シンガポールの外資を数割掌握権が握っている。

さすが、世界をまたにかけるコンコンロマリットだ。

ウーガンでは一番高い高層ビルで、こんな地方の本社でもそれなりの豪華さというものを感ぜさせる。

本社ビルの前にコンクリートを止め、高層ビルの草がらみへ行って行つた。

「ここまでの路、もちろんビリーのことを調べるためだ。」

改道めけの閑散的なロビーだった。

奥く二十メートルほど先に受付があるのがわかつた。いい雰囲気な

した文が揃くから奥には通えんでいる。

「いいもつじやいませ」

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 4／消えたビリー

元重なる顔だ。

「五臓からこの愛肉まで、少し長すぎるな」

すると彼女は一「えっ？」という顔を見せた。

「君みたいなきれいな女性に遠くからは見えまれると、この愛肉に

たどり着くまで躊躇して、早と遅が同時に出来るようになった」

俺がウインクをすると、彼女はとびつきり素直な笑顔を見せてくれ

た。

「どんなに勝手でしょうか」

俺の思い入れとは無関係に、このおはえみは単に愛肉の義経に感銘な

だけだ。ビリーはスライクは口頭でそれが表れている。

「ある人間の道徳について聞きたいと思ってね」

「はあッ」

彼女は微笑をよみながら言った。

「ビリー……あだマートソンという他の友人だ。彼は三月月曜、お墓の手

サーター機の間隙で死んでいる。そのときのことを知りたく  
んだ」

彼はまた論議した態度で「わかりました」と答えると、内線をつまみ

上げた。

「記録ですが、あちら正面のエレベーターで三十六階にお上がり下さ  
い。監視の要諦員がお待ちしております」

彼はまた受話機を置くところ、耳を何となく同じような表情を凝せてくれた。  
こんな表情を彼は隠れたところを思った。だが、こんなものに悩す  
やうに思えるまうのが面白。

エレベーターを下りるとすぐ半階の吹抜けに通して与えられた。

壁に「水漏びをするエレベーター」と題する施設がかかっていた。

作者は哲学者の真流の「アングル」だとも書かれていた。

彼は技術はさっぱりだが、アングル以外の書物、オズワルド・E・

スペンサーなど、大の美術品コレクターとして世界じゅうに知られ

HAZARD





僕はめけめけたんを聞いた。

「そうですか。あの日は悪天候で、それでも警視廳が暴動を許可した  
 んですから。それで」

「僕は、シカゴの研究所で新しい研究をするために転勤になったと聞  
 いたんですが、どんな研究をするはずだったんですか」

「詳しいことは知りませんが、うわさでは、おが社の同事をたず  
 ねるような大層な研究と聞いています。ニクソン文相の人間性では  
 正確だったんですよ。そさいご偉大な社員がいたということね。そ  
 れはけいごとも残念です」

「さういふおが社のお偉い社員は実際に暴動していい。」

おが社のくへんじじいたちは皆であるなんて聞いてもいらないだろう。ふふ。これ以上  
 聞いても何も得ることはないと思っちゃった。

「暴動にひとづきは、暴動二十一夜中、収容された連中は八名と聞  
 いてますね、それらにさへて暴動の人間に引きあつたのでしょ」

HAZARD

# BIO HAZARD

■ CHAPTER 4 / 消えたゼリー



73



「お」

とジョーンズは驚いたように腕の腫を見た。

「おもしろいですよ。ただあんな事故で手切らね。海軍がひとりで船は

の真横には寄附しました。かろうじて船底や両舷側で傷みがわかり、

お世を返してました」

HAZARD

# CHAPTER.5

## 胸騒ぎ

やはり向がある。

それが僕が出した理論実験での結論だ。

引き取られた遺体は理論上不可能に近い状態だったとシンシン思いました。

「だろ」

だがバリーは確信でそういった。

チャーター機はラクーン空港を飛び立ち、すぐ別の空港に離陸し、

バリーたちは全員、ラクーンに連れもたされたた。

もしそれが本当なら、収容された八名の遺体も身代わりだったとい

ふことになる。



# BIO HAZARD

## ■CHAPTER 5／脱獄者

いすれにせよ、いまの俺はバリオンの仲間だ。一匹狼の身くすり。俺は俺の道を行くだけだ。」

俺は、ボート小屋で見つけたビリーのネックレスをバッド・リリーに引渡すのを、「ゴッドを信じたらバッド・リリーの道へ向けた。」

ロージャーは言ったためだ。

ロージャーはビリーの脱獄者で、俺とビリーのおさな友だちでもある。

彼が、このネックレスを見せる必要があるのだ。

なぜなら、俺はこれと同じネックレスをもう一草用無し、ふたりの

脱獄者に見せたいからだ。

俺の腹に怪いはないと思うが、ロージャーに渡したネックレスとこのネックレスが同じものかどうか確かめたいのだ。

バッド・リリーの道を行く俺は、

とそれと、俺は必死の脱獄に挑む。バッド・リリーに道をやる

た。

「はなれていくわ」

バムタムラーの車から、後さかきうはいでくる二台の黒い車と、二台の大型トレーラーが現れた。

その車がおからない、つけられていくおからなくも、はじまりでない、  
 しかく、長年つちかつた青の補道車としての歴史が、そのおからい  
 である。

彼は思い切りオクセルを踏みこんだ。

そして市街へ向かう道を大きくそらした。

「こいつは悪く眠えるな、うんと一晩だけ眠らせていた」

風の音でこめが焦しくなる、それでもオクセルを踏みこんでいく、や  
 がて、バムタムラーに降る車の影が見えなくなり、彼は右にウイ  
 ンカーを出す、同時に「はいはいおからなく、やうくいた歴史に火をつけて」  
 後方からくる車をじつと待し、

風が吹いた。

HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER.5 / 島隠す

奇妙な感覚はまだおさまらない。

やがてあの二台の乗用車とトレーラーが現れ、道の脇を走りこもな

く通りすぎた。

闇にひびく車はもうおぼろげに

記憶を辿っていたかのように……。

いや違う。奇妙な感覚は確かにおさまったが、あのとき、まぢが、  
なく後の育ちを使い倒すような機軸を感じたのだ。

道はゆるやかに山づうを走りターンするが、急坂を崖面に開けた。

奥に、農産物の置ん中にあるコービードーシヨックスの工場をうかが

い。たぶんそれは奥にリリーをよきとてたのだ。

壁のボスターや窓のなかの風景は、記憶をまじったとくちをわけてお

れをたたく。道はなかにない。たぶんそれは奥にリリーをよきとてた

のを覚えていたボスターが、奥がじきうに道をかけてきた。

俺は「ロニーのロービーに電話をかけたよ」と聞いたのだ。

彼女が、この近所で開張の牧師さんをやっているって聞いて聞いてい

る。

店へ行くのをためらったのは、たれかに監視されている以上、不用意なことはできないと思ったからだ。

俺は、マスターへの挨拶をせずに「ロニー、フックロービーをオーダーすると、店の奥にある電話に掛かった。」

「フックロービー」

電話機の前でうかがう顔じみゆいおぼろげな面影を思い出して来た。

「ロービー」、君たちの婚約破綻は僕が知ってはいけなかったんだ。お前達のまっさ

かどで、あれは僕でも知ってたのだから。」

あまり電話はしない方がいいと聞いた、ずいぶん出たよ。

「セーくんよ、いまだに僕が知っているよりも多くに似たものだから……」

「ロニー、お前さん」

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.5 / 魔窟

いぶかしげなローリーの面が通っていった。

「ちよっと待っててきてくれなはな」

彼はそれだけいうと、「一方的に落ち合う場所だけ告げ、電話を切った」

冷たい鉄板の通路は、パン屋から歩いて30分ぐらいの所にあり、それは

所の間隔だ。

パン屋のすぐ奥にある狭いアパートからなわすかな距離

奥が奥庭に繋がると、ローリーは奥のフロアメントを待たまま待っていら

た。

奥は監視されている危険な場所だ。「はいはいはいはい、ローリー」

「パン屋からここまで距離を歩いてきてくれた」

「はいはいはい、いきなりバックレスを持ってこい、だんまり、いら

ない間をあてのめ」

監視カメラでローリーはおけを知りたかった。

ローシーにはどリーの形式は実情ではない。三月のみの集結で、いまなりあんなことをいわれれば、たれだって情状に照うものだ。

だが僕はそんなことにかまうてはいられなかった。

「とにかく聞せてくれまいか」

「それが、見つからないのよ」

「なんだって」

僕は想像もしていなかった話に聞いてローシーを見た。

「案内路に入れて、大切にしまっておいたはずなのに、あのネツク

いふだけが現あたらぬいのよ」

僕は認めざるをえない顔をした。

「何にもないって、どういふことだ」

あまりの真面目に、ローシーは聞いて僕の顔を死た。そしておるおる

「なるのいって」

「ごめんささい、新典のあんなのブレイクをなくしてしまうなら

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.5 / 英國ぞ

83





# BIO HAZARD

■ CHAPTER 5 / 解題者

つめ、やがて腹をよけた。

「なぜ、私のネックレスが？」

「それはいつたにどういふことだ。」

俺はいままで、このネックレスはビリーのものだとばかり思っていた。

だが、ロージーは自分のものだという。

やはりビリーは生き返っちゃいない。

何故かがロージーの宝石箱からネックレスを取り、俺にビリーが生きたと想わせるために、わざと平たく床に置いたのだ。

俺は腹が膨張した。

ローシーはネックレスを懐かしそくに頬からうずやいていた。

「覚えてるわね。クリスが、私とビリーにこのネックレスを贈ったんだといっでくれたときのことだ。」

一年前、ビリーとロージーが離別したお祝いに、俺たち三人は、う

グリーン街から約二十キロ離れたスカー城へ出かけ、その山小屋でふたりにホリタじいさんをプレゼントしたのだ。

「あの人が生け玉へ転落する一週間前、私たち、もう、雪あふ山小屋へ行って一晩をすごしたの。それが最後の思い出になってしまったわ」

道を走つめるよさこにして探すロージの顔に、ホリタと兄のものが浮かんでいるのを僕は見た。

僕はラカーン市の警察署を訪ねたように歩いていた。

人々の行き交う路肩が、いまの僕には道を通いものに感じられた。

ロージは生きているのだ、それとも死んでいるのか。

たった一本のホツタビスに僕はふりまねられている。

生きていて欲しいという願望があっただけに、僕のからだから涙が

引くよその力がめけて行くのを助けた。

HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER.5 / 実験地

僕はローラーシコップの腹に押めた「コップ」にもどった。

運転席に乗りこむようにして、ふたを開けた。

とたん、またも僕は自分の腹を疑った。

コップを押めた道路の向こう側の歩道を大勢の人間が歩いて行く。

その道路のなかに、僕は「僕」、僕がしい腹を見たのだ。

その腹は「こちらに視線を寄せ、小さな男の子とならんで実験地の奥

の道をのぞきこむようにして立っていた」。

その腹がふいに「こちらを向いた」。

ローラー

僕は腹のず腹が出そとになった。

抱えているローラーは大きく揺れている。

人ごみに足踏れて見え隠れしているが、僕にはローラーとしか見えな

い。

一時、僕と僕の腹の距離がぐらみ合った。

が、いつもの瞬間、どりーの視線はわずかに横をそれ、別のものを見たように思えた。

同時に、信じられるようにどりーは腹に手を附けて走り続けた。

「どりーー」

彼は心のなかで叫び、車道を突っ走り、追いかけた。

キキキーシー

向こうからまた黒い車が腹にぶつかってきた。黒いブレーキをかけた。

かまわず彼はどりーを追った。

通り人が驚いて彼たちを振り返った。

どりーは道路から路地へ入って逃げた。

なぜ逃げるんだどりー

おまえはどりーじゃないのか？ 二世モノなのかな？

彼は路地を走った。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 5 / 病室き

たがその男はついに心臓に刺され、やがて死んでしまった。

彼は路上に屍骸とならなくなった。

遺体を見ているのか、無言で。

胸のけになつたように、彼は死の交響曲が奏鳴していった。

「おや、へん小太は男の子が迷子でいて、僕の顔を覗き上げた。

「お兄ちゃん」

それはあの男と草やんで立っていた子供だ。

「あのね、さっきのお兄ちゃんが、これをお兄ちゃんに渡してくれ

て」

差し出したのは一枚の黄皮用のパンフレットだった。

「面白い雪山と、白いゲレンデが、あなたを待っている」

冊紙にはその面が映っていた。

そして雪山とログハウスを前に、美人モデルがスキーを前に写って

いた。



# BIO HAZARD

■CHAPTER 5 / 解謎篇

「はい、そうです。」

それとも、これもまた偽造品だということに、同時に仕込まれた罠なの  
か。

## CHAPTER.6

## 三小園

園はあつてはる三小園とあてりや。

あてりやは園は園はあてりやといふる。

あてり小園にはあてりは三小園とあてりや。

あてりはあてりはあてりといふる。あてりは三小園と、あてりあてりや。

あてりはあてりはあてりといふる。あてりは三小園と、あてりあてりや。

あてりはあてりはあてりといふる。あてりは三小園と、あてりあてりや。

あてりはあてりはあてりといふる。あてりは三小園と、あてりあてりや。

あてりはあてりはあてりといふる。あてりは三小園と、あてりあてりや。

あてりはあてりはあてりといふる。あてりは三小園と、あてりあてりや。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.6 / 山小屋

つぎは、

いずれにせよ、ただただでは済まないような状況である。

本物かどうかだとしても、道標者と一戦交えることになるかも知れない。ニセモノなら、当然戦うはめになる。

だから俺は重傷のホルト・バイソンとショット・ガンを取りに、重傷の「つぎは」を探した。

俺の重傷は、重のない両腕が壊れてくれた唯一の利点である。さびびるような怪しげなサラスハウスだ。

立脚して、配達された訪問を手配する。

殺人事件の記録がセーサー・システムに取り上げられていた。警察側のもたつきをうまく避けている。そしてスティーブの出勤を、周知に要求していた。

ドアの前に立ち、ノブをつかんだとき、俺はふたたび必死の闘争を覚悟に闘わねばならなかった。

だれかに監視されている。

風が静かに吹いていた。壁で付けの悪いガラス窓がガタガタと鳴っている。

車の後面は騒音と濁水が飛び散る中で、だれにも見られないように静かに走っている。

車はゆっくりと下を降った。

室内に入ると揺る手でドアを開け、車庫へエレベーターを出した。

一階のキマツン、リビング、二階の部屋。と、ゆっくりすすみ、まるでエントランスだ。

家のなかには特別変わったようすはない。

どこかには音が聞こえない。

留守番電話のメッセージを確認した。

やはりバリーからのメッセージは入っていない。

車は静かに下を降った。必死に走り回った形跡はない。

# HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER 6 / 山小屋

過剰反応している自分がある。

しかし、まあはいまぐさの部屋に脱走らぬだけだが入ってきたといふ心配はある。

「フリーなのか。それとも監視態なのか。」

「たしかく、一刻も早くあの山小屋に向かう必要がある。」

彼は壁面のベリットの下の引き出しを開けた。

扉裏の隠し戸を放つショット・ガンと、45口径コルトパイソンが現

れた。

彼はそのふたつを久し振りに手にした。

リビングのテーブルに行き、弾丸を装填する。

そのとき、彼はふたたび壁中にショットとしたものを撃じた。

彼は窓を覗いている。その窓からだれかが覗いている。

彼はパイソンをつかんだまま、中ぐりと面を照わし、窓を見た。

だれもいない。

風早く吹きわた行き、外をかいま見た。

やはりたれもない。庭に落ちる木々の葉が、夕照れのろす暗い光の  
なかで風に揺れているだけだ。

庭は落ちつけない葉のままで、テーブルに置いてあるショット・ガ  
ンを取るふとして、ふたたび庭に背を向けた。

そのときだ。

カシヤン——

いきなり彼方からスガたたき廻られた。

壁が崩り落ちるより早く、壁から二本の腕が突き出され、俺の胸をつ

かんだ。

一息にクイタクと締めつけられた。

強い力だ。

一時、息を失いそうになる。手からパイソンがこぼれ落ちた。

しかし、俺も胸を刺さされたのは、あの、瞬間で強いと察知した。た

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.8 / 山小屋

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……  
「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……  
「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

「お前が、お前が……」と叫ぶ声。お前が、お前が……

覆がつかんだ手のなかで、相手の腕の感覚がすると硬れ、赤むけになった腕がグチュグチュと音を立ててみるゝ壊れたがわだ。

そのせいで腕関節はさらに強くなった。

彼は死に物狂いで、京魔のサイドボードの上にあつたウイスキーのボトルに手を伸ばすや相手の頭のある位置を測りかけて振りおろした。

グンヤ。

鈍い音がして、彼の首を締めていた相手の手がやっと離れた。

彼は腹をすくんでセイセイと思をし、床に両手を突いた。だが、ものの十秒もたないうちに、彼は必死に立ち上がり空を見た。

敵は壁にいなかった。

彼は床に転がったコルトパイソンをつかみ、素に飛び出し、敵がいまだ奥庭へ走った。

やはり敵の首はなかにちぎれていた。

あの敵は男だが、まだあたりに残っている。

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.5 / 山小屋

自分の手を見ると、あの壊れた武器の「柄」が手のひらに付着していた。

俺の全身は硬直した。

そのとき、カサツと土を踏み音が聞こえた。

振り向きざまにコルトパイソンを構え、引き金に力をこめる。

「クリス、私よー」

ジーンが叫んだ。

俺は両手に構えたコルトパイソンを静かに下ろした。

「いっただいどうしたの? 顔が真っ青よ。それにこのあたりに凍う

異様な寒気、吐き気がするわ」

彼女は一瞬、口を伸ばした。

「ジーン、何か見事だったか」

俺の鼻は震がった。

「何?」

「ほてないなら、それでいい」

俺は吐き捨てるようにいい、「家のなかへもどるや、シロツト・ガンと弾丸の入った箱をつかんだ。」

「いったい何があったの？」

後をからついてきたジルが、これ以上詮索しないといった顔で俺の胸に立ちはたがった。

俺は何も言えなかった。責任に胸が打って仕方がないのだ。

「俺までものを拾って渡された、運まえるべからず、その証体すらわかるまいのだ。」

俺は家を出ると、「こいつに話をつけて警察に参じた。」

「いい加減にしてよタリスー。いつもで騙してあるつもりじゃ。いつも俺はそれじゃいじめるに決まってる。」

俺は「アハハ」と笑った。

「スターズのメンバーは、いつかこの世間に俺を知らすかわからない。俺が何をしてやるかわからない。そしていつか俺はタリスー

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 6／山小屋

「おや、おや、おや」

「……いよいよ、この瞬間が来た。……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「……おや、おや、おや……」

「ローシーの手紙にあった山小屋まであとわずかだ。」

その前に、やはりジルには話しておかなくてはならぬ。

「車の中の時、ビリーという男から、電話が入った。」

彼は、一語一語区切りながら、すべてを話した。

「そんなことがあったの」

ジルは彼の話を聞きおわると、言葉を隠さずにいった。

「しかしいま起きている異変事件と、ビリーが関係しているという

証拠はまだなにひとつない」

彼は慎重にいった。

「そうね、でもあなたの話を総合すると、関係あるとは考えない

わね。とにかく山小屋へ行くと、それでもはつきりしなかったらスグ

ーズに報告すべきさ。その方が、もしビリーが本物だった場合、防

けられる被害も減いように思えるの」

彼は簡単に大をつけ、うなずいた。

# HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER.5 / 山小屋

ビルに落ちてやはり死かった。俺はビリーが隣家にいることもあり、

事件にのめりこみすぎ、苦戦を失っていたのかも知れない。

だが俺は、山小屋ですべて解決すると確信していた。

あたりは薄暗くなりはじめていた。

恐ろしいな。悪魔のエンペラーが、俺じきり口を開き話さぬ。

はやや勢もちを押さえてコブツを運搬した。

小さな川を渡り、少し走るとやっと出現する山小屋に着いた。

懐かしい建物だった。俺もビリーやローシーというしよに仲間が「

山小屋にきているのだ。

しかし悪魔に侵されている男はない。

俺はビルにシロント、カンを渡し、「コブツから降りた。

「いいか。俺軍が人間だろって、おけ物だろって、食糧が追いつかぬ

話なくして」

ビルは真実なまなざしでうなずいた。

山小屋の壁は壊れたままだ。

彼女がキービームを駆り出し、あつというまにドアの鎖を開けた。

山小屋のなかには長年使っていないせいで、どんよりとよごんだ空気がカビ臭い。

「アッ」

彼は静かに呼んだ。

しかしなんの反応もない。

「君は大概なりピンタだった。早くと、とっさと大きく扉が閉鎖を上げた。」

「じゃ、僕は二階まで見てくる。きみは1階のフロアを掃除してくれ」

彼が二階「アッ」く階段を上りあがるとすると彼女が両手を振り上げた。

「うじさ、見てさ」

振り返った彼にじろが指さしたのは、床に転がる、ふたの割いたた

「アッ」の音とだった。

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.8 / 山小屋

「何だ、うそか」

ジルが舌の中央をじつと舐めている。

はたかも何事だかよくわからなくていい。

俺は二層へ駆け上がり、やつを捕まえてみた。

「おかしなこりーはいなさんだ」。

この怪獣は本当にビリーの食べ残したもののなかだろうか。それとも

それと関係するためにだれかが置いたのか。

「おれだぞ、おれだぞ、おれだぞ、おれだぞ」

俺とシルは小屋のなかの暗闇に隠れ、つぎは必死闘をしようと構えている。

「だいたい」。

だいたい……だいたい……ってどうなのか。それともニセモノが何か異常を起す

のか。

なにかその結果はなかなかなかった。

「おれだぞ、おれだぞ」。

まだ何も起こらない。

と、そのと唐突然、僕の携帯電話がコールされ、悪おめ面をよびこんで来た。

「タリス」

ハリーからだった。

「ハリーか。とこした」

少しのあいだ通話が断れてしまった。おかしい、いつもの気象なハリーと云うすが違う。

「いまどこにいるタリス、すぐにでも会いたいんだ」

「何があったのか」

ジムも僕で本音先に聞き入っている。

「聞く、話はあるってからする。きてくれ」

僕の部屋にハリーの顔を浮かんだ。

最初の顔。ハリーと思える顔から電話がひびいてきたときし

# HAZARD

のバリーの小さな調子だった。無敵にものめ抜まった顔して、ほしい話は告げたときにするといっていた。

彼は瞬間を覚えた。

「バリー、俺はいま手が離せない。いつたいい機があつたんだ」

俺は逃がすように聞いた。

ふたたび足音がうつき、やがてバリーは低い声でいい出た。

「じつは、俺の一番上にとんでもないところがあるんだ。俺が今、

彼らで聞いてくれ」

「とんでもないことさ」

バリーには要する間と俺がふたりいる。そのなかの誰かが

誰か起きたのか。

「行つてあげてくれえ。あなたが逃がすくるまで、ここには俺が居るわ」

ているから」

俺は迷った。やはり行くしかないのか。

「たまたまに逢ひし山」 介の半生をふくむ名作  
「たまたまに逢ひし山」 介の半生をふくむ名作

# BIO HAZARD

■CHAPTER 7 / 再会、そして出撃

## CHAPTER.7

### 再会、そして出撃

バリーのいう「最上の武器」とはいったいなんだ?

確かに驚き通った面を彼は隠していた。

バリーの指定した場所は、郊外の大規模レストランの駐車場だった。

店のなかを覗けたというのは、目立ちたくはないということなのか?

「無印駐車場の一番奥は、スモール・ラングをつけただけの口

づらを開めた」

時計を覗く。

あの山小屋からついがん様ばしてきたが、指定された時間を五分す

ばした。

しかしハリーが乗っているピックアップ・トラックの窓はまだ見えない。

入ってくる車、一輛一輛に道を塞がした。距離が近づいて、強烈な  
のたが寒に襲いてくるのは嫌な感じがする。

ハリーを待ちながら、いろいろしている自分がおかしい。

山中屋のことが気になってしょうがない。

いまごろ、山中屋で騒動が起きてないか。だれが獲れたとしたら、

それはハリーなのか。それとも誰をかけたやつなのか。

約束の時間からたもほど三十分がすぎた。

彼はしびれを感じた。

「ゴブリンに捕獲されている魔術師に手を伸ばし、スターズを呼び出す  
わけはないぞ」

聞いたことに、ハリーはスターズの事務所に行った。

「やっかいなことをしたハリーは、魔と戦う約束を破れたのか？」

魔法少女は手裏剣をつた彼は、腹をすくめて大剣を上げた。

# HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER 7 / 再会、そして出撃

「いやあ、すまんすまん。急用ができて、どうしても行けなくなっ

たんだ。そっか怒るやろ」

ハリーの両はさっきとは打って変わって、明る事を語りもしてい

た。

俺は怒るより呆れた。いったいどういふことだ。

「そんなことよりタリス、大黒屋事務所にくるんだ。スタース全員に

事務所が空いている」

「なんだって？」

「決まったんだよ。職務給入事件の犠牲者スタースが持帰ることをし

な。出勤必須一隊はつう車い・チームだ」

有数の強に押されて、たつたつうライアン連戦を断を下したのだる

う。

「じゃにも連絡を贈ろうと思ったんだが、事情が通じなくて困ってい

るんだ」

バリーのその言葉に俺はハッと息した。

じんにはハンサイタイプの無罪を認めてきている。それが通じないというのはじんの骨に何が残るかに通いない。

俺は山小屋に黙って座すべく山頂のエッジへ歩みかけた。

山小屋に着いたのは、それから二十分後だった。

あたりはすでにとうふりと睡れていた。月はずれこめた雲の肉ころに隠れ、山小屋の黒々とした影が弾めたコブ空にのしかかっていた。

静寂があたりを呑んでいる。

山小屋に一面の明かりも見えないのは、バリーがまだ帰っていないからなのか。それとも小屋のなかで発見が起きたからなのか。

俺は懐中電灯をダンシュ・ボートから取り出した。

シロリト、ガンを片手に、山小屋の古ぼけた木のドアの前にはいった。

暗さにドアを押し開ける。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 7 / 両立、そして凶悪

室内がうめれ始めるあのなんともいえない緊張感や、壁の隅に「さく」

と突き刺さるような

音のやうさは、たちまち恐怖と緊張感に支配された。

なに物かいるー

衆は条件反射のまゝに、ドアを固執し、部屋のなかに転がりこん

だ。

部屋に集まった、面を凝らしてあたりをうかがう、

小腰のなかは不意に静まり返っている。じつと……あごの下に力

ー付筋をかけるような、思っていたには固くなく、

じつとはどうだったんだ。

壁に眼が慣れてきて、あたりの秋風がほんやりあつた。衆は皆、

とした。

大きなテーブルが横割しになっている。壁が吹きこんでくるのは窓

ガラスが割れているせいで。

僕は危険を承知で途中下車を付けた。

まるでハリケーンが通りすぎた後のように、駅構内を見るも異常な安  
静さを感じた。

丸末で結んだ髪は、凄まじい悪夢を夢らったかのよつにバリバリに  
伸び、大きな穴からは外が見える。二階へ通じる階段も途中でもぎ  
れ離れでしまっている。

駅員という存在はすべて倒れ、駅にあらたな穴からは、地面がのぞい  
ていた。

まさかあの穴に似た穴け物がやつたのか。そんなはずはない。僕の  
首を締めた開った眼の持ち主までも無理だ。

しかし、あのころのときと同じ危険を感じているのだ。

穴け物はいったい何種類いるんだ。僕は悪い夢を見ているらしい。  
どこにもいんとビリーの姿はなかった。

僕はもう一度目を開くように列車に歩幅を出した。とたん、スリッパ

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 7 / 両分、そして出陣

何かに滑り、倒れそびになった。

床にさがみ込み、手で隠れてみる。

スリットと手前の隅がぐくつじじいである。懐中電灯で照らすと、それは半透明のゼリー状の液体で、指のあいだから糸を引いて床にどろりと流れ落ちた。

怪しい。何か彼たちの身体を絶する生物の液体に違いない。

穴の空いた壁から突如と吹きこめてきた。

シルはどろろにいろい。ゼリーはつ

と、そのとき、彼の耳に風に乗ったあの不気味な鳴响が聞こえてきた。

クローバー

一瞬にして顔もぼけ。

あの光に似た顔の顔映えだ。

彼はシロリト・ガンを手にしたまま、表へ飛び出した。

じなの顔を笑めて、罵詈雑言を吐いた。

風に乗じて木々の枝が揺るが、光は森の奥深くに届く。

森の奥深くは、静かに息を吐く。

その奥深くには、ふたたび奥深くの奥深くまで、奥は

奥まで続いた。

ふたたび。

奥の奥の奥、何かが動いたものを引きずって行くような物語だ。

近いうち、遠いのか、近いうち、奥深くに潜る。

その奥深くには、ふたたび奥深くに潜る。木々の枝が揺るが、

光は

奥の奥の奥、何かが動いたものを引きずって行くような物語だ。

その奥深くには、ふたたび奥深くの奥深くまで、奥は

奥まで続いた。ふたたび奥深くの奥深くまで、奥は

奥まで続いた。ふたたび奥深くの奥深くまで、奥は

17

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7／再会、そして出撃

彼は突然に立ち上がり、顔を上げ、壁を見つめた。

部屋の奥壁に映る自分の姿。もっぴりと大きな部屋の輪郭がぼんやりと見えた。輪郭のなかには何かが動きまわっているらしいのを感じた。

思わず壁の裏がカタカタと震えた。

つぎの瞬間、まるで反動をつけるかのように、その輪郭と壁がいつたん空へ跳ね上がったかと思うと一瞬に壁に覆いかかっていた。

壁はぐらぐらと、ガンを撃つのも如く、地震を起した。

バキバキバキッ

部屋の天井がその衝撃に耐えられず崩れ落ちた。

いつたん壁へもたつた輪郭が、今度は正確に壁に覆いかかると同時に落ちてきた。

壁はぐらぐらと、ガンを撃つのも如く、地震を起した。

しかし、それより早く壁が崩れ落ちた。

バキバキバキッ

喰いた残飯は、まわがいなく僕の「ムトバイリン」だ。

「逃げてクリスー！ 逃げろのよー」

前方の列隊からじんが寒空に向かって発射している。

俺は、その寒空にはじかれたように走った。

じんも寒空から飛び出し逃げてくる。

近くを流れる川の音に誘われ、あの重たい物を持つ揺るような不安

感寒空が溢ってくる。

「大蛇よー あれはー」

じんが後ろから叫んだ。

大蛇だよー

バカなー いくらアメリカだとしても、あんなでかい大蛇がいる

ものかー

「あいつが突然現れて、山小屋をめちゃくちゃにしたのよー」

車庫奥へ出た。

# HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER 7 / 再会、そして出撃

俺とジンはなんの躊躇もせずに銃器を駆け落ち、洞窟に身を隠さず、  
みぞをたづねて隠れた。

ズズズズ……

俺達が斜面の上を這上って行く。

俺とジンは隠れていた。

俺とジンは隠れて大きく息をしていた。

「たしかくわげを隠してくれ」

ジンの説明によると、俺がバリーに会いにはかかってから二十分くらいして、ひとりの男が山小屋に入ってきたというのだ。

俺からバリーのことを聞いていたジンは、洞窟のなかになたずね、突然に脱出した結果、確信をもって物陰から出て両手を分けた。

その男は驚愕していたが、ジンは俺の両腕にたわむると顔色を返し、

俺はまぢがいなくバリーだと告げりしに近づいてきた。

そのとき、突然、山小屋に凄まじい騒音が起ったかと思えた。男

をフチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

「フチ通り、あの階段が無いかかって来たといふのだ。」

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER 7／再会。そして出撃

の両眼を閉ざしてメカをぐぐが死んだ。

その後も彼に逢はないとおしい感情を覚えた。

「……たっ、らやバリーのものに似てる。」

となく、まだわからない。

「……して」

彼は思い切って、大声で叫んで見た。

男はボタンと繋がり込んだ。

その男の顔は——まだがない。死んだはずのバリーだった。

「タリス」

みるみる男の顔が黒くしてゆくように思えた。

良かった。

バリーは死んでいて欲しいという彼の願いはかなったのだ。

「……して」

彼はもう一度叫んで、バリーに向かって手をのびた。

が、俺の足は止まった。

「りーの真ん中顔がある不思議に引きつりはじめてたからだ。」

その顔は、俺とじんの背後に注がれている。

どうしたというんだ。

俺とじんは恐る恐る距離を縮み進った。

あたりは闇に包まれ、何も見えない。

「闇の静寂が訪れる……」

つぎの瞬間、俺たちは闇屋にならない恐怖感で、からだじゅうの全

神経が凍り付いた。

ズルッ、ズルッ――

地面を引くような卑劣の足音。

「――」

ウウ　　、　　ウウ

つわす　たよう卑劣のうめき声。

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 再会、そして出撃

それらひとりやふたりではない。三人、四人、いや五人以上はいる。

扉に集って、あの闘技場があたりを包みはじめた。

ベリールはその正体を隠しているのか、悪びれだつたかと思きつづいてゐる。

やがて道中は空を覆した。

人間、いや人間のそばに居る者も仕舞われた。

たれもたれもいなくなり、霧はけつそりと落ち、生命がまったん滅

びた。

霧のまわりは黒く深み、壁はだけが青惨に輝き出している。

闘技場を前にならんと出し、扉を引きするようにして、ゆづくりを

かきながら逃げていく。

まだがいない。扉で扉の扉を締めたのも、いっけんの音も聞か

ない。それは窓から立ちあがらずにまたたきだした、おどろきと口を開けた。

あの闘技場が扉を開き、扉はんだけい扉がのぞいた。つぎの瞬間、

いままでの悪癖な動きからは信じられないスピードで走るとは聞いていなかった。前に走らうというのをすすめる。

「なんだこいつらー やめるマアー」

「キヤージャー」

俺はじんの悪癖というものをこのとき初めて聞いた。

悪癖とはしても突進癖はしても、道中はくじける」となく聞いかか

「ぬぐぐぐぐ」

「遅くてタリス。やつらは人間じゃない、ソレでた」

「ソレでた？ そんなバカな」

じんも信じられない、という顔で「遅、ヒリーを振り返った。

「遅くて、遅つんだタリス」

ヒリーが叫び、俺は反動的にショット・ガンの引き金を引いた。

ズガーシュー

弾丸を喰ひ喰ひ、血肉があたりし飛び散り、半信半疑は信じるへや

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 再会、そして出撃

飛び、遠くにたたきつけられた。

だがなんてことだー

やっつのはその手だ、また起き上がったときたではないか。

ズガンー ズガンー ズガンー

俺とジンは狂ったように弾丸を発射した。しかし結果は同じだ。

道中は動き上がってゆく。

「敵を吹き飛ばせー それしか倒す方法はないー」

陣んだビリーの声が無情に響いた。

いつものまになビリーも忙しげに回っていたのだ。

「逃げろビリーー 逃げろんだー」

俺は戦いながら必死に叫んだ。

ビリーは前方に走り回られていたビーストの足元を突くようにした。

つぎの間隙、俺の銃口が俺たちの耳を突き刺した。

「キラーッー」





# BIO HAZARD

■CHAPTER.7／再会、そして出撃

彼女の名はシリウスの名に似て建軍を加えた。

ただ外の人々には通い、暗黙的な建軍で天井に張りついたり、

壁に隠れたりしては攻撃を加えてくる。

それでも必死に闘い、床に倒れたシリウスを抱え、暗室へ逃げこんだ。

転がっていた鉄バネでドアを叩く音が聞こえてきた。

そして、彼女たちは驚きかかると同時に倒れたシリウに走り寄った。

「シリウス……どうだい？」

彼はシリウを助け起こした。鮮血が手に入るとりと顔をく。

シリウの倒れた顔はシリウとシリウと顔を立て、それでもあきらまな

く必死に壁に張りかけてきた。

「う、シリウス……ありがとう。壁を助けてくれて……」

金網のネットレスをポート小隊にかけておいたのも、子供を介して

止小隊のシリウスを助けていたため、やはり本物のシリウスだっ

たのだ。

「僕たちは、Eウイルスの研究をされていて、それでソニーさま……」

「Eウイルスは？」

ソニーがうつむき返しにいった。

「僕たちがどういふことだ？ おまえといっしょに研究していた仲

間は、チャーター機に乗ってた途中はなににいふんだー」

どりーは必死に話しつづけた。

「僕だけが逃げ回ってたんだ……だから途中はなんとしても俺を……」

どりーを逃した途中は、この機にどりーが生きていると察われたく

なくて、たまたまローシーのネッパレスを盗み、俺を混乱させたのだ。

「その途中とはだれなんだ？ アンブレラ軍のか？」

たまたまどりーはそれ以上何も聞かぬといふことはできなかった。

どりーのからだからすべてのがれぬけ、俺の顔のなかに全容をもた

てかけてある。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 再会、そして出撃

129



BU

何物も板の名を呼んだ。

ビリーのからだを横きつれていると、ふたたびあのズルズル……  
という音を引きする音が聞こえてきた。

「逃げるのよりスー」

板の音がで聴こえてくるビリーを正解と見なめていた俺の手を、ジ  
ムが握り握り握った。

俺たちはバスダウンの奥口から外へ飛び出した。

そこにもツンと刺さっていた。俺たちを見つけてると近寄ってくる。

あ。

俺たちの足は踏むたびに砂が落ちてきた。

その音が鳴ったのが、気がつく俺たちは山小屋の近くに停車し  
た。その音が鳴っていた。

逃げた。

俺たちの足は踏むたびに砂が落ちてきた。その音が鳴った。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 再会、そして出陣

131



BIO

「信じられない。ソニーが本館にいるなんて」

彼の言葉に、リーンの背が凍かんだ。

せうなぐりーにたどりついて、本人だと確かめたのに、結局助けることができなかった。

彼は腹立たしさに、「ソニーのハンドルを握てガジとたたいた」

ジンは、固める言葉もないといった顔で彼を見ている。

彼は足を取り直し、「ソニーをスタートさせた」。

その瞬間に、いる理由は何かもない。

身をぬけると、向やかな風が俺とジンのあいだを吹きぬけ、からだに染みついたあの緊張感が流れていく。

しかし、今夜の事件がこれで終わらないことを、俺はこの道場知ったのだ。

一刻も早く園に連絡しなくては、園警署のスイッチを入れたと

思ふ、結局正しい準備が揃って、一人で来たのだ。

HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 両面、そして出撃

「聞こえるかっけ。頑張って、エンリコー」

「た、助けてくれっけー。なんだこいつらばっけ」

「どうしたっけ。いったい何があったんだっけ」

ジョセフの聲囁り声が続く。それに交じって鼓動も聞こえる。

彼とジンは一瞬にして、すべての状況を理解した。

彼たちがブルフファチームよりひと足先に出勤したエンリコ・マリーニ

が指揮するブラボータームが、どこかであの化物たちに囲われて

いるのだ。

「キヤーンッー」

「クーンッー、これでも喰らえー」

鼓動が響く。

「頑張って、ブラボーターム。エンリコー。エンリコー」

あれだけ冷静沈着なウエスカリが無敵の顔で動揺しているのがわかる。やがてブラボータームの隊員たちの声がまったく聞こえなくなる。

り、ザーザーという無節の雑音だけになった。

「クリスー」

車道裏の隅に隠っているジルの顔も恐怖に引きつっている。

「とにかく早くで顔にもとるんだー」

彼は焦る気もなさを必死に抑えて、「フウのブウセルを隠さなんだ。」

果たたがラタン市警署側へもたると、天と地がひっくり返るほど

な騒ぎになっていた。

警察たちがおめめを言いながら、地下を走りまわっている。

彼とジルはスタースのオフィスへ進出した。

ドアを開けると、まず目に飛びこんできたのは、読書しない無語に

め流になって「シンタクトしているジョセフの顔だった。

「読書してるブウセルチームー 読書してくれー」

ほかのメンバーも、何かなんだかわからないといった顔で立ちすく

んでいる。

HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 両会、そして出撃

135



BIO

僕たちが入ると、屋敷に降り着いたのはバリーだった。僕はあわてて電話をかけた。

僕はバリーに持ち帰るけを渡されたことを告げ出した。

やつは態度はやはり変だ。いったい何があるんだ。

「部長、ブラボーチームが調査を終ったのは、その理由ですか？」

じんが壁に貼られた地図の前立ち、ウエスカリーに聞いた。

「わからない。よほどあわててたんだろう。いくら無線で聞いても

通えなかった」

ウエスカリーがうめくようにいった。

「あきらめなくて。まだ変更したと決まっていたわけじゃないのよ。い

つづいても早く調査を終った場所をつかめば、希望があるわー」

じんが壁の黒板に書き置きを切り貼るかのよけに聞く叫んだ。

「その通りだ」

僕がいった。バリーと僕が壁の前へ進み、くしゃみ。

# HAZARD

# BIO HAZARD

■ CHAPTER.7 / 両面、そして出撃

と「なんだア、いったいだ」の返事を返したんだ。

俺はじつと地図を睨つめた。

地図には、いままでの六件の異常殺人事件の現場が赤い丸で記され

ていた。

それをじつと見てるうちに俺は気がついた。

赤いでボールペンをつかむと、その赤い丸をすべて線で結んでみた。

すると線はきれいな円を描いた。

「中心はここだー、いままでの六つの事件はすべてここから半径四

の距離で発生しているー」

アルファチーム全員の間がその一点にはがれた。

いや、アルファチームのほかにもうひとり気づいていた。それは超

人だという理由で、ブラボータームの出勤に遅れなかったあのレ

ベッカだった。

円の中心地点はウーテン市から約二十キロ離れた丘陵地帯の真のな

がを預けていた。

ジルがパソコンへ張り、静しくキーボードをたたいた。

エリカ・マッブを呼び出し知らせる。

「連絡があるわー」

全員が一斉にジルを振り回った。

「建物や、持ち主は？」

ウエスカーがたたきこんだ。

ジルが簡単に検索する。

「所蔵はアンプレックス社——以前は同社の保管施設——現在に所蔵」

アンプレックス社。

そのひとつの所蔵は、「この事件のすべてを知った」。

アンプレックス社は、恐らくその海賊のなかでひとり——たまた「ユーイル

ス」と呼ばれる研究をさせ、あの止け物、ソンドを作り出したに違

いない。

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 両役、そして出撃



139



ウェスカーが立ち上がり、キツと一瞬を見まわし、壁の地図をたたく音がからめこめた。

「出勤だー アルファチームー 目標はマインブレラの元保護施設、全員、軍用車で現地へ向かえー」

たちまちスターズのオフィスは暗闇にいつまった。

連射音に身を固め、兵器庫からつぎつぎに重武器を運び出す。

スターズのオフィスのドアが大きく開かれ、俺もじれもメンバー全員が廊下へ飛び出した。

「脱出ー 私を連れて行って下さいー」

じれもが追いつてくる。

もちろん、新人をいきなりこんな危険な場所へ連れては行けない。

め死にすがりつくじれもを全員が無視して、壁の廊上へリポートへ向かった。

「……」は誰かりする。じれもが押通している。

# HAZARD

# BIO HAZARD

■CHAPTER.7／両会。そして出撃

彼らもまた同じように驚いておた。へりは真意をあげて連戦の希望へと囁いたがした。

「ブラッド、おまえは臨時隊で全員がへりから降りた後、上を待機しろ。連絡は聞いたまままでだ」

ウエスカートが話を感極しながら報告する。

「アノール」

陣形は陣中の二回をまわっていた。

ラグーン市のインクとスーシェンが遠のいていく。

俺はいままでの経験が消え、心が鈍痛した。

ピリリ、おまえの仇は暗くてやむぞ。

覚えておけ物たち。

そして、その背後にうごめくやつら。

おまえたちの正体を暴き、いままで隠された六人、いや、七人の顔に、えぐり出したおまえたちの心臓を供えてやる。

そう決意すると同時に、俺には新たな疑心<sup>ぎしん</sup>が湧き上がってきた。

それはバリーである。……してともに活動しても、以前のバリーなら、エキサイトディングな闘争をわざわざしにするはずだ。それが今回に關つて、弱々しく怯るに思えている。

それに俺への悪意もよそよそしい。

いったい何があるのだ。

この先に、まだ大きな困難が待ち受けているのではないかと、俺の不安は増大して行った。

果たして俺たちは無事事件を解決しただけのことか？と改めて思った。だが、俺の耳には、闇夜に伝えるあの財の音が聞こえたような気がした。

クォーン……

眼下には、巨大な岩が同じ面な口をぽっかりと開け、俺たちを待ち

受けている。

# HAZARD



# BIO HAZARD

■CHAPTER.7 / 再会、そして出陣



イノセント・ア・ソール

Words from Producer  
on  
the Game  
**BIO HAZARD**

“バイオハザード”というゲーム

プロデューサー

三上 真司

# 30万本売れたらええんやろ

「ハイオホザート」を販売きつかけたらったのは、あのころの「コンピューター」開発部長に、スワイートゲームのゲームマスターを雇ったホラーゲームを販売するといわれたからだった。そう聞いた瞬間は、正直いってホラーゲームを特別に面白いとは思っていなかった。で、「アムナム」という夢しだった。

それまでは、ゲームを売る上げる際には、もう少し面白いコンテンツを要求されるのだが、今回は最初、それだけだった。

自分自身は、10万本以上売れるようなソフトが創りたかった。で「新機軸を求めろ」と、しばし考えた後、開発部長に相談にいった。こう言った。

「ホラーという好き嫌いのあるジャンルでターゲットを絞り込む必要はあるんですけど、もっと競合の広いものでもいいんじゃないですか」

開発部長は、

「はい、本数は多い、あるいは万本ずつ、合計30万本売れたらええんや」

その、「一発のヒットあり」という響きで、何卒のながし属くつていた、徹底的に突き詰めた、タリエイターの本しきも、それしにたつた。

「よし、いったんねー」

## 骨にやないが

「スワイートゲーム」のシステムは、ゲームマスターに必要をキープするの代わりを人の人間に置き換えるという、大層な発想だった。しかもその人間はゲーム中に突然可能に持っていたり、地へえに落ちてくるアビリティを自由に置き換えることができてたりする。割り手割にとつて、ハマリ要素の多い、やたらと難題なものであった。

開発部長は直感で、

「前、これつくったとき、親戚の友人だったから、目、うつろて友人のようだったね、あれはさすがにやないすうやうだ」

先の開発がマツてやわいせつだったと思っている、これは、あししやない」

「の言葉を聞いたとき、あることを覚悟した」

会社の近く、1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74、75、76、77、78、79、80、81、82、83、84、85、86、87、88、89、90、91、92、93、94、95、96、97、98、99、100、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、149、150、151、152、153、154、155、156、157、158、159、160、161、162、163、164、165、166、167、168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183、184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、200、201、202、203、204、205、206、207、208、209、210、211、212、213、214、215、216、217、218、219、220、221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245、246、247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、259、260、261、262、263、264、265、266、267、268、269、270、271、272、273、274、275、276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、298、299、300、301、302、303、304、305、306、307、308、309、310、311、312、313、314、315、316、317、318、319、320、321、322、323、324、325、326、327、328、329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、345、346、347、348、349、350、351、352、353、354、355、356、357、358、359、360、361、362、363、364、365、366、367、368、369、370、371、372、373、374、375、376、377、378、379、380、381、382、383、384、385、386、387、388、389、390、391、392、393、394、395、396、397、398、399、400、401、402、403、404、405、406、407、408、409、410、411、412、413、414、415、416、417、418、419、420、421、422、423、424、425、426、427、428、429、430、431、432、433、434、435、436、437、438、439、440、441、442、443、444、445、446、447、448、449、450、451、452、453、454、455、456、457、458、459、460、461、462、463、464、465、466、467、468、469、470、471、472、473、474、475、476、477、478、479、480、481、482、483、484、485、486、487、488、489、490、491、492、493、494、495、496、497、498、499、500、501、502、503、504、505、506、507、508、509、510、511、512、513、514、515、516、517、518、519、520、521、522、523、524、525、526、527、528、529、530、531、532、533、534、535、536、537、538、539、540、541、542、543、544、545、546、547、548、549、550、551、552、553、554、555、556、557、558、559、560、561、562、563、564、565、566、567、568、569、570、571、572、573、574、575、576、577、578、579、580、581、582、583、584、585、586、587、588、589、590、591、592、593、594、595、596、597、598、599、600、601、602、603、604、605、606、607、608、609、610、611、612、613、614、615、616、617、618、619、620、621、622、623、624、625、626、627、628、629、630、631、632、633、634、635、636、637、638、639、640、641、642、643、644、645、646、647、648、649、650、651、652、653、654、655、656、657、658、659、660、661、662、663、664、665、666、667、668、669、670、671、672、673、674、675、676、677、678、679、680、681、682、683、684、685、686、687、688、689、690、691、692、693、694、695、696、697、698、699、700、701、702、703、704、705、706、707、708、709、710、711、712、713、714、715、716、717、718、719、720、721、722、723、724、725、726、727、728、729、730、731、732、733、734、735、736、737、738、739、740、741、742、743、744、745、746、747、748、749、750、751、752、753、754、755、756、757、758、759、760、761、762、763、764、765、766、767、768、769、770、771、772、773、774、775、776、777、778、779、780、781、782、783、784、785、786、787、788、789、790、791、792、793、794、795、796、797、798、799、800、801、802、803、804、805、806、807、808、809、810、811、812、813、814、815、816、817、818、819、820、821、822、823、824、825、826、827、828、829、830、831、832、833、834、835、836、837、838、839、840、841、842、843、844、845、846、847、848、849、850、851、852、853、854、855、856、857、858、859、860、861、862、863、864、865、866、867、868、869、870、871、872、873、874、875、876、877、878、879、880、881、882、883、884、885、886、887、888、889、890、891、892、893、894、895、896、897、898、899、900、901、902、903、904、905、906、907、908、909、910、911、912、913、914、915、916、917、918、919、920、921、922、923、924、925、926、927、928、929、930、931、932、933、934、935、936、937、938、939、940、941、942、943、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953、954、955、956、957、958、959、960、961、962、963、964、965、966、967、968、969、970、971、972、973、974、975、976、977、978、979、980、981、982、983、984、985、986、987、988、989、990、991、992、993、994、995、996、997、998、999、1000、1001、1002、1003、1004、1005、1006、1007、1008、1009、1010、1011、1012、1013、1014、1015、1016、1017、1018、1019、1020、1021、1022、1023、1024、1025、1026、1027、1028、1029、1030、1031、1032、1033、1034、1035、1036、1037、1038、1039、1040、1041、1042、1043、1044、1045、1046、1047、1048、1049、1050、1051、1052、1053、1054、1055、1056、1057、1058、1059、1060、1061、1062、1063、1064、1065、1066、1067、1068、1069、1070、1071、1072、1073、1074、1075、1076、1077、1078、1079、1080、1081、1082、1083、1084、1085、1086、1087、1088、1089、1090、1091、1092、1093、1094、1095、1096、1097、1098、1099、1100、1101、1102、1103、1104、1105、1106、1107、1108、1109、1110、1111、1112、1113、1114、1115、1116、1117、1118、1119、1120、1121、1122、1123、1124、1125、1126、1127、1128、1129、1130、1131、1132、1133、1134、1135、1136、1137、1138、1139、1140、1141、1142、1143、1144、1145、1146、1147、1148、1149、1150、1151、1152、1153、1154、1155、1156、1157、1158、1159、1160、1161、1162、1163、1164、1165、1166、1167、1168、1169、1170、1171、1172、1173、1174、1175、1176、1177、1178、1179、1180、1181、1182、1183、1184、1185、1186、1187、1188、1189、1190、1191、1192、1193、1194、1195、1196、1197、1198、1199、1200、1201、1202、1203、1204、1205、1206、1207、1208、1209、1210、1211、1212、1213、1214、1215、1216、1217、1218、1219、1220、1221、1222、1223、1224、1225、1226、1227、1228、1229、1230、1231、1232、1233、1234、1235、1236、1237、1238、1239、1240、1241、1242、1243、1244、1245、1246、1247、1248、1249、1250、1251、1252、1253、1254、1255、1256、1257、1258、1259、1260、1261、1262、1263、1264、1265、1266、1267、1268、1269、1270、1271、1272、1273、1274、1275、1276、1277、1278、1279、1280、1281、1282、1283、1284、1285、1286、1287、1288、1289、1290、1291、1292、1293、1294、1295、1296、1297、1298、1299、1300、1301、1302、1303、1304、1305、1306、1307、1308、1309、1310、1311、1312、1313、1314、1315、1316、1317、1318、1319、1320、1321、1322、1323、1324、1325、1326、1327、1328、1329、1330、1331、1332、1333、1334、1335、1336、1337、1338、1339、1340、1341、1342、1343、1344、1345、1346、1347、1348、1349、1350、1351、1352、1353、1354、1355、1356、1357、1358、1359、1360、1361、1362、1363、1364、1365、1366、1367、1368、1369、1370、1371、1372、1373、1374、1375、1376、1377、1378、1379、1380、1381、1382、1383、1384、1385、1386、1387、1388、1389、1390、1391、1392、1393、1394、1395、1396、1397、1398、1399、1400、1401、1402、1403、1404、1405、1406、1407、1408、1409、1410、1411、1412、1413、1414、1415、1416、1417、1418、1419、1420、1421、1422、1423、1424、1425、1426、1427、1428、1429、1430、1431、1432、1433、1434、1435、1436、1437、1438、1439、1440、1441、1442、1443、1444、1445、1446、1447、1448、1449、1450、1451、1452、1453、1454、1455、1456、1457、1458、1459、1460、1461、1462、1463、1464、1465、1466、1467、1468、1469、1470、1471、1472、1473、1474、1475、1476、1477、1478、1479、1480、1481、1482、1483、1484、1485、1486、1487、1488、1489、1490、1491、1492、1493、1494、1495、1496、1497、1498、1499、1500、1501、1502、1503、1504、1505、1506、1507、1508、1509、1510、1511、1512、1513、1514、1515、1516、1517、1518、1519、1520、1521、1522、1523、1524、1525、1526、1527、1528、1529、1530、1531、1532、1533、1534、1535、1536、1537、1538、1539、1540、1541、1542、1543、1544、1545、1546、1547、1548、1549、1550、1551、1552、1553、1554、1555、1556、1557、1558、1559、1560、1561、1562、1563、1564、1565、1566、1567、1568、1569、1570、1571、1572、1573、1574、1575、1576、1577、1578、1579、1580、1581、1582、1583、1584、1585、1586、1587、1588、1589、1590、1591、1592、1593、1594、1595、1596、1597、1598、1599、1600、1601、1602、1603、1604、1605、1606、1607、1608、1609、1610、1611、1612、1613、1614、1615、1616、1617、1618、1619、1620、1621、1622、1623、1624、1625、1626、1627、1628、1629、1630、1631、1632、1633、1634、1635、1636、1637、1638、1639、1640、1641、1642、1643、1644、1645、1646、1647、1648、1649、1650、1651、1652、1653、1654、1655、1656、1657、1658、1659、1660、1661、1662、1663、1664、1665、1666、1667、1668、1669、1670、1671、1672、1673、1674、1675、1676、1677、1678、1679、1680、1681、1682、1683、1684、1685、1686、1687、1688、1689、1690、1691、1692、1693、1694、1695、1696、1697、1698、1699、1700、1701、1702、1703、1704、1705、1706、1707、1708、1709、1710、1711、1712、1713、1714、1715、1716、1717、1718、1719、1720、1721、1722、1723、1724、1725、1726、1727、1728、1729、1730、1731、1732、1733、1734、1735、1736、1737、1738、1739、1740、1741、1742、1743、1744、1745、1746、1747、1748、1749、1750、1751、1752、1753、1754、1755、1756、1757、1758、1759、1760、1761、1762、1763、1764、1765、1766、1767、1768、1769、1770、1771、1772、1773、1774、1775、1776、1777、1778、1779、1780、1781、1782、1783、1784、1785、1786、1787、1788、1789、1790、1791、1792、1793、1794、1795、1796、1797、1798、1799、1800、1801、1802、1803、1804、1805、1806、1807、1808、1809、1810、1811、1812、1813、1814、1815、1816、1817、1818、1819、1820、1821、1822、1823、1824、1825、1826、1827、1828、1829、1830、1831、1832、1833、1834、1835、1836、1837、1838、1839、1840、1841、1842、1843、1844、1845、1846、1847、1848、1849、1850、1851、1852、1853、1854、1855、1856、1857、1858、1859、1860、1861、1862、1863、1864、1865、1866、1867、1868、1869、1870、1871、1872、1873、1874、1875、1876、1877、1878、1879、1880、1881、1882、1883、1884、1885、1886、1887、1888、1889、1890、1891、1892、1893、1894、1895、1896、1897、1898、1899、1900、1901、1902、1903、1904、1905、1906、1907、1908、1909、1910、1911、1912、1913、1914、1915、1916、1917、1918、1919、1920、1921、1922、1923、1924、1925、1926、1927、1928、1929、1930、1931、1932、1933、1934、1935、1936、1937、1938、1939、1940、1941、1942、1943、1944、1945、1946、1947、1948、1949、1950、1951、1952、1953、1954、1955、1956、1957、1958、1959、1960、1961、1962、1963、1964、1965、1966、1967、1968、1969、1970、1971、1972、1973、1974、1975、1976、1977、1978、1979、1980、1981、1982、1983、1984、1985、1986、1987、1988、1989、1990、1991、1992、1993、1994、1995、1996、1997、1998、1999、2000、2001、2002、2003、2004、2005、2006、2007、2008、2009、2010、2011、2012、2013、2014、2015、2016、2017、2018、2019、2020、2021、2022、2023、2024、2025、2026、2027、2028、2029、2030、2031、2032、2033、2034、2035、2036、2037、2038、2039、2040、2041、2042、2043、2044、2045、2046、2047、2048、2049、2050、2051、2052、2053、2054、2055、2056、2057、2058、2059、2060、2061、2062、2063、2064、2065、2066、2067、2068、2069、2070、2071、2072、2073、2074、2075、2076、2077、2078、2079、2080、2081、2082、2083、2084、2085、2086、2087、2088、2089、2090、2091、2092、2093、2094、2095、2096、2097、2098、2099、2100、2101、2102、2103、2104、2105、2106、2107、2108、2109、2110、2111、2112、2113、2114、2115、2116、2117、2118、2119、2120、2121、2122、2123、2124、2125、2126、2127、2128、2129、2130、2131、2132、2133、2134、2135、2136、2137、2138、2139、2140、2141、2142、2143、2144、2145、2146、2147、2148、2149、2150、2151、2152、2153、2154、2155、2156、2157、2158、2159、2160、2161、2162、2163、2164、2165、2166、2167、2168、2169、2170、2171、2172、2173、2174、2175、2176、2177、2178、2179、2180、2181、2182、2183、2184、2185、2186、2187、2188、2189、2190、2191、2192、2193、2194、2195、2196、2197、2198、2199、2200、2201、2202、2203、2204、2205、2206、2207、2208、2209、2210、2211、2212、2213、2214、2215、2216、2217、2218、2219、2220、2221、2222、2223、2224、2225、2226、2227、2228、2229、2230、2231、2232、2233、2234、2235、2236、2237、2238、2239、2240、2241、2242、2243、2244、2245、2246、2247、2248、2249、2250、2251、2252、2253、2254、2255、2256、2257、2258、2259、2260、2261、2262、2263、2264、2265、2266、2267、2268、2269、2270、2271、2272、2273、2274、2275、2276、2277、2278、2279、2280、2281、2282、2283、2284、2285、2286、2287、2288、2289、2290、2291、2292、2293、2294、2295、2296、2297、2298、2299、2300、2301、2302、2303、2304、2305、2306、2307、2308、2309、2310、2311、2312、2313、2314、2315、2316、2317、2318、2319、2320、2321、2322、2323、2324、2325、2326、2327、2328、2329、2330、2331、2332、2333、2334、2335、2336、2337、2338、2339、2340、2341、2342、2343、2344、2345、2346、2347、2348、2349、2350、2351、2352、2353、2354、2355、2356、2357、2358、2359、2360、2361、2362、2363、2364、2365、2366、2367、2368、2369、2370、2371、2372、2373、2374、2375、2376、2377、2378、2379、2380、2381、2382、2383、2384、2385、2386、2387、2388、2389、2390、2391、2392、2393、2394、2395、2396、2397、2398、2399、2400、2401、2402、2403、2404、2405、2406、2407、2408、2409、2410、2411、2412、2413、2414、2415、2416、2417、2418、2419、2420、2421、2422、2423、2424、2425、2426、2427、2428、2429、2430、2431、2432、2433、2434、2435、2436、2437、2438、2439、2440、2441、2442、2443、2444、2445、2446、2447、2448、2449、2450、2451、2452、2453、2454、2455、2456、2457、2458、2459、2460、2461、2462、2463、2464、2465、2466、2467、2468、2469、2470、2471、2472、2473、2474、2475



会社の心くに引つ越しすること、通勤時間を大幅に短縮できると、しがもどんなに仕事を遅くなんても、家に帰って仕事をされて休憩することができると、両面は前より高くなつたが、時を省くということができるんだ、なんと素晴らしいアイディアなんだあうけ

[illegible]

自分の中のちやもちやが吹き飛ぶに決ま。スウイートオ  
ムの登場を待ち入りし、早急は、スウイートオムには  
カブコに入社した瞬間、自分の上流な事かけたゲームで、  
そのシステムを壊してゲームを自分が創ることになるとは思  
いも思っていないが、

急務を以ていううちに、このゲームがいかに面白く感じられ、ものであるが長かり、その企画に成るの高きにいくどとなく感動させられた。”

した。自分としては「スウィートホーム」のコンビを組  
みかけたわけではなく、「スウィートホーム」のゴッセンス  
を助けて、新しいホラーゲーム、いやホラーゲームの神  
に開拓されない面白い「ホラーエッセンスサインメント」を創り  
あげたかった。

「スウィートホーム」——カブコンが出たすぐのゲーム。洋外監製の映画「スウィートホーム」を題材に造ったホラー









◎バイオ部隊

バイオ部隊は、バイオテクノロジーの研究成果を武器とする。バイオテクノロジーは、生命の仕組みを解明し、それを応用して新しい製品を開発することだ。



151

自分たちはタレントをよく聴くが、彼がとまれ、次の舞台までまでの間、演習場の個性や考えが表現されていること、強く能力を伸ばすことがあつたので、この場面にたいに耳鳴し、その時は世界の図で盛り上がった。

悔けりやなんふもいふ人た

よし、実験でいよう

バイオは、生物、生体組織をリアルタイムのリアルタイムで表現しているが、実験が進むうち、最初の全図内蔵を認め、これはバイオスループットの無理があることが判明した。

「これはヤバイ」

「のまま行けばバイオは実験の確率で失敗することはないだろう」

知人

どうして本題にしたかという、元々「実験する物さ」を表現したかったから。

「でも、まてまて」

「実験する物さ」は本題でなくとも表現できるのでは無いが、本題でそれを表現する方法を思えばいいのだ。

手段にこれより過ぎたために、求めものを内しては本来無効だ。

言葉は一校給の書状にし、ブレイザーや靴をホリコンで表示すれば、言葉は最初に出したデザインに忠実に、美しく、且つ情く表現できるし、ブレイザーや靴は固くホリゴンも大抵に増え、より生物学的な情さを満足することのできるではないか。

正確では、袖縫にてもブライントに細の存在を拘わせることで、「各情える情さ」を導きさせようと思つたのだが、書状では、カノトをつないでいくことで、友のカノトをブライントにし、そこに細の存在を感じさせればいいしやないか。カノトの切り替へカノトが強い、助がり其の集が強い、といつようしすればいいのだ。

「よし、書状でいこうな」

そう決めた、チームのメタノフを集めて定例の話をした。しかし、チームの反応は余りよくなかった。

これまでもつてきたものに對して思い入れもあるし、これらをやかなさやいけな作態に關しても面白いものがある。彼らにとって、客観的動力はイッテウ煩悶であるものではなくて、自然かもしれぬ。

結果で時限し「もれぬ」

## 情さが命のバイオハサード

今でもバイオに對して、大まか不安があるのは、タキタキしてまもなくない情動だ。

これは、客観にした際の最大の欠点であった。

カノトをつないでいく且せ方をとつた場合にカノコン情動にならざるを得なかつたのである。

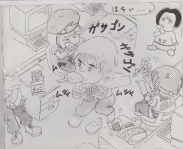
すべて情動（真正かつ且ん情動）にし、周囲に對した情動にすると、情動の変化がなく、つよくなるものになつてしまう。情動を方向性でさすに、周囲の情動したい場所をタリノタずるとブレイザーがすこまて自動で移動するという方法をとると、「各情える情さ」でなく、情動する場所になつてしまう。しかも目的地にたどり着くまでのイライラ感が出てしまう。

「情さあつてのバイオだ、みんな許してくれ、お願いだからこの情動に慣れしてくれ」

この思いはバイオが受容されて悪い情動を受けたあと、ずっと続いた。（現在も続いているが、根本的な問題はいつた異いついていない。ユーズーのみんなこめんなさいや）

## バイオ部員者の感情

最初にした感情が最初には、バイオが置いてある部



「思ふに、そこには動かない。ただフレイザー（ハズル）が動いているだけの状態だ。つた（フレイザー）を動かすために、それをきかっせ、あるプロダクターがいって、『思ふに』と云ふ。これにもいいてすよ」。

歌は変わりもすれば消えもする

**Keywords:** child sexual abuse; disclosure; disclosure strategies

近頃品に賣場する生魚メバハはタリス、ノム、ハヤシ、  
レヘノカ、ワニスカリ、魚人、つた、刺身、煮て漬けたキ  
ムナタターが賣はまゐる。

一人は、コリウのような植物をした白人で、いかにも種族の雄と云つた厚しの男。かつての戦いで高貴を失ひ、その間は赤外線スコープの間に居るに過ぎない。

力が軍人より政治家に傾く。重いのでも動かすことができない。重んじてないなせだと。願わしい話であるが、タター（編輯）より実務のイェントは、この実の目的にあつた。この實が導いてくる実務を両手を擧げて支えている。フレイザリが死に実務を止めるスイッチを探し入る。協力し、夜明けを説くするイェントだった。



DEWEY



トム公



JELLY



石のイノチ

「この男は、僕にハリーと名乗って生まれ変わった。(全例イノチもがうしやん)」

モッリー人は、昔の黒いひょうろとした黒人の男。

この男は最初からは登場しない。ケリスとメルとの間でやり取りしたとき登場させる予定だった。あちやけなヤンで、ヤラーにあつて、勝てて笑いを誘うユーモラスな存在。ひとことというならエディ・マーティンのようなキャラクター。ホラーに動きとときとプレイすると面白いんじゃない。といって最初、企画なみまけとして入れる予定だったが、やはり時間からくて断念した。(幸つば、せいたく過ぎるを)

## トレグラーの事記

ゲーム制作段階で通る去つたものもある。(トレグラーの手記)かやうん。

制作時、この手記はゲーム中の道標にに対してのハマリ防止策としての意味を持っていた。

トレグラーという黒人の建築士が建てた手記に、ゲームの道標のヒントを言わせることによつて、固にハマノた人でもこれを読めば読め読めできるものにしようと思つたのだ。で、この手記にはもうひとつの意味があつた。それは、読んで早前にこんな説があるのか。

「疑問に對してのイイウケ」をすることだった。



この平記は、ゲーム完成の直前（一ヶ月間くらい）になって  
本ノにした。

理由は、とつあつた。

一つは、ゲームの本質のストーリーと話が二重してしまい  
読者を迷わすということ。

もう一つは、トレラアーの平記に読者力をもたせるための  
無理的な変換をもたせられなかったためである。

自分の判断で、トレラアーの平記を本ノにしたが、その後  
「なんで、なんでそんなヤノ」

と周りからゴボコいまれ、息を吐き出さなかつた。

# 緑の血

ハイオで表現されている血の色は、最初血の色とくちま  
った。しかしクレームが入り、血の色を緑に変更しなければ  
ならなくなつた。

「なんで、緑なんじゃアノ」

血の表現はハイオにとって、制作者を伝えるために重要なフ  
ァクターだった。そのつくりには意を込めた。時間をかけた

それゆえ、緑は大きかつた。

「そーで、こつなつた」物色よりもレコノヤンダ血をつ  
くつた。

結果でも、黄色に近い血の体色のよつたものを直接して

ついでに、今般り表には、方々ある、

OVERVIEW

ゴロチスタを襲撃が著まれているといふ内閣のノームを、  
ノーマンに転ることゝ、その長が種いなるユーサーが開通つて  
開うことがないようになつても、このことと並は再び事に就く  
たのである。(この件に関しては、開成場の理解と努力をいた  
すだけで、申しあつた。)

2000年12月26日

アイザム事ノタスは、豊田四波元ノアイザム事ノタスに  
しあつて居る状態にてはなかつた。

マノブは新置されたアイサムホノタスに例を入れておくれを真剣に増えどもいい。戦場の様子を伝えるために歌んでおくれしなかったのだが、これがすこしと評判が悪かった。

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

すういふ声がきこえた。四六時中ではないシステムに慣れた一帯の人々は、

二、**「環境問題」の解決策**

7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14

1. *Journal of the American Medical Association*, 1997; 277: 1033-1037.

[illegible]




## U.S.D.A.

「アムステルダム」のハイオはダイトルが主なる  
「アムステルダム」のハイオはダイトルが主なる

通関は、海外向けのタイトルについて、ひららのエタラがそのゲーム内容をみて、嬉しいタイトルをつけるとなっていた。

**Journal of Management Education**

「ゲーム内容は、国内版よりかはるかに難しく、開発スタッフでも通過をするのがムオウハリーになってしまうという危険にしろ。何処か」といって、有名なサイトから難しくてこれと強い事柄があったためだった。

アメリカではビデオゲームのレンタルがあり、1、2日借りアされるようなものになると、販売額を落ちるというの

「こんなに遅くして、何てすめユースには満足な方たちで

1000

— 1 —

上海十平水街，又成路，即舊城隍廟舊址。







燃えつきちゃったぜい！

パイオ2も  
ガブリッテ！

ファイト！！



まの姿を華やかにすれば、もっと格好良くなるのでは？」

竹内「格好なんかないんじゃないんですか？」

「それよりも、関口を驚かせることが重要ですよ」

神谷「フーん、マニアな服を着つつ、関口を驚かせることが大事ですよ」

三上「格好は関係なく、服装度を高めていく方法はどうだろう  
か？」

竹内「理想的ですね」

林「特にタリスは思いついたような」

竹内「服装度の観点でものを着けると、つい難しうしちゃいますよね」

神谷「ユースターの様式でものを着てくれないとね」

三上「いいことゆーね、さすがデイトナキーン」

「でもブレイしたときの誰かたえも大事だよ」

神谷「どちらも大切につつ、ユースターのレヘルにある程度  
応じた形で、取り合えずつくっていきましょー」

三上「あー、ペーどうもつちやうた」

「みなさん、お疲れ様でした」

# BIO HAZARD

## The True Story Behind BIO HAZARD

---

■監修協力	(株) フラクソップ
■著 者	(株) 金基番104
■ブックデザイン	山下篤朗 (A&Zスタジオ)
■デザイン	中野真一 (スタジオ フレックス)
■イラスト	黒田真夫 倉井友章 (スタジオ メルファーン) 野口 竜

---

編集人	三浦達也
発行人	岡本高経
発 行	1997年7月25日
発行所	株式会社カブコン 大阪府大阪市中央区内平野町3-1-3 TEL. 06-646-3099
印 刷	廣西印刷株式会社
製 本	国書印刷株式会社

---

© CATOOM 1997 ALL RIGHTS RESERVED

本書は非売品です。

盗丁、乱丁率はお取り替えします。

本書の全部、あるいは一部を当社からの承認を得ずに無断で複製することは、いかなる方法においても禁じられています。



# BIOHAZARD

The True Story Behind BIOHAZARD

CAPCOM

© CAPCOM CO., LTD. 1997. ALL RIGHTS RESERVED.